

「南無十方三世佛」より以下は、第三に歸依方便真言門なり。此の真言智の外に妄なし、外に妄なき處即ち是れ真言なり。自身に若し此の真言を誦すれば、自の真を悟るが故に歸依と言ふ。亦真言を誦することあり。頌の中に南無とは度我なり、亦是禮敬と云ふ。「三種常身」とは、法身等の三身なり、生死本より不生なりと悟る、故に常身と言ふ。「正法藏」とは、正とは邪に簡ぶ、法とは軌則なり、藏とは恒沙の徳を含むなり。「大心衆」とは、菩薩乘なり。

「我淨此身離諸垢」より以下は、第四の施身方便真言門なり、亦真言を誦することあり。真身の以外に別の身なし、三世の如來も亦同體なり。衆生は別身ありと妄に執す。此の真言門は、能く我身佛身等しくして、別なしと解せしむ、故に施身と言ふ。

「淨菩提心勝願寶」より已下は、第五に發菩提心方便真言門なり、真言と長行とを誦することあり。我身と佛身と既に別なし、佛の菩提智は我が智に同じ。此の真言は此の法を悟らしめ、能く知らしむるを發菩提と云ふ。「増加」とは、能く真言の義を顯し加ふるなり。「菩提心」とは、自性清淨自覺なり、心とは中實の義なり、故に「離一切」等と云ふなり。「蘊」とは五蘊なり、「界」とは十八界なり、「處」とは十二處なり。「能

不審なり、使の字か、然らば「妄を」して生じざらしむの意。

執」とは妄心なり、「所執」とは妄境なり、「捨」は離なり、「法無我有」とは妄境等を離るるなり。「自心平等」とは妄想なきなり、又自心とは妄想の自心なり、平等とは妄心の自心本不生なり、是の故に能執所執乃至本來不生と云ふ。「如大空」とは、大慧の日輪の中には、生死の晝夜の別なし、「自性」とは慧日即ち身とす、二捧妄生せず、眞性と同せしむ、故に「如」と云ふ。此の増加の句は、譯人梵本を讚歎するなり、若し能く梵本を誦すれば第一なり、漢文に依りて、意を得て讀誦することも亦得。「道場」とは寂場なり。

「十方無量世界中」より以下は、第六に隨喜方便真言門なり、亦真言を誦することあり。如實智は自ら嫉あることなし、自ら嫉なき智は瞋嫉なからしむ、誠を至して此の眞智を念誦すれば、眞實の智に異ならざらしむ、故に隨喜方便法と言ふ。

「我今勸請諸如來」より以下は第七に勸請方便真言門なり、頌と真言とあること前に同じ。眞智の大悲を以て、恒に物を利す、物を利するが故に法雨を降らしたまへとなり。誠を至して此の眞言を念誦して、法を請じて世に住せしむ、故に勸請と云ふ。

「願令凡夫所住處」より以下は、第八に奉請法身方便真言門なり、頌と真言とあるこ



と前に同じ。法身は恒に本真に住したまふ、恒に住するを以ての故に、法身に至らしむ、此の眞言を誦じて、直に奉請するが故に、奉請方便の法と云ふ。  
「所修一切衆善業」より以下は、第九に廻向方便眞言門なり、願と眞言とあることに前に同じ。本覺の眞智の外に散なし、散なきを以ての故に廻向に同じ。勤苦して此の眞言を念誦して、眞の本法に歸するを廻向と云ふなり。

「復造所餘諸福事」より以下は、第十に入佛三昧耶明門なり、是れ法の身を生ずるなり。此の中に願と印と眞言とあり。所餘とは念誦の眞言の以外なり。「遍清淨」とは、自の三業の中の不淨を生ぜざらしむるなり。「哀愍救攝」とは、即ち是れ他の三業の中の不淨を生ぜざらしむるなり。「心性」とは、心の本性の如く自清淨なり。「身隨所應」とは、面を本尊に向くるなり。又三部五部の中に於て、何の尊を以ても、是れ我が本尊と云ふ者なり。「以安坐」とは、頭・頂・鼻・齋みな悉く正直にして、結跏し及び半坐する等なり。「淨除三業道」とは、三業の不淨を生ぜざる、即ち是れ道なり。「印」とは眞言所依の身なり。問ふ、身と智と云何が別なる。答ふ、身は是れ諸の功德の所依なり、智は即ち照明の義なり、然れば則ち用に約すれば別にして、體に約すれば一

一、三、二、亂脫

一、亂脫  
二、經等以下具  
緣品疏(第九卷)の  
文。

なり。■入佛三昧耶の持明とは、(一)經に「時に薄伽梵、廣大法界加持に住して、即ち是の時に於て、法界胎藏三昧に住したまふ、此の定より起ちて、入佛三昧耶の持明を説きたまふ」と云へり。梵音に毘富羅とは、是れ廣大の義なり、謂はく、深廣無際にして測量す可からず、是の如くの諸法の自體を名けて毘富羅法界とす。諸佛の實相と眞言の實相と衆生の實相と、皆是れ毘富羅法界なり。此れを以て更相に加持す、故に名けて法界加持とす。復次に男女交會の因縁を以て、種子の胎藏に託して失壞せざるが如きは、即ち是れ相加持する義なり。是の如くの諸佛の國王、明妃を夫人として、和合して共に毘富羅の種子を生じたまふ。大悲胎藏の爲に持せられて、失壞あることなし、故に法界加持と名く。世尊普遍く一切衆生を加持して、みな平等の種子を作し竟りて、即時に遍法界胎藏三昧に入りて、此の一一の種子を觀じたまふに、皆是れ蓮華臺上の毘盧遮那なり。普門の眷屬無盡の莊嚴も、亦大悲漫荼羅と等しくして異なることなし、而も諸の衆生は未だ自ら證知すること能はず、故に聖胎(イ)俱舍に在りと名く。若し藏を出づる時は、即ち是れ如來の解脱なり。世尊是の如く現に觀察し已りて、即時に三昧より起ちて、三昧耶の持明を説きたまふ。三昧耶とは、是れ平等の義、是

(三) Kōra 藏の義  
輔の義なり。



れ本誓の義、是れ除障の義、是れ警覺の義なり。平等と言ふは、謂はく、如來此の三昧を現證したまふ時、一切衆生の種種の身語意、皆悉く如來と等し、禪定智慧も、實相の身と亦畢竟して等し、初發心の時と、地波羅蜜滿つる時と、亦畢竟して等しと見たまふ。是の故に誠諦の言を出して、以て衆生に告げたまはく、若し我が言ふ所、必定して虚しからずば、一切衆生をして、此の誠諦の言を發す時、亦三密の加持を蒙りて、無盡莊嚴、如來と等しからしめんと。是の因縁を以ての故に、能く金剛の事業を作す。故に三昧耶と名く。本誓と言ふは、如來此の三昧耶を現證したまふ時、一切衆生に悉く成佛の義ありと見たまふが故に、即時に大誓願を立てたまふ、我れ今要す、普門より無量の方便を以て、一切衆生をして、みな無上菩提に至らしめん、衆生界未だ盡きざるを劑りて已來、我が事業終に休息せず、若し衆生ありて、我が本願に隨ひて、此の誠實の言を發さん時、亦彼の所爲の事業をして、皆悉く金剛の性と成らしめんと。故に三昧耶と名く。除障とは、如來、一切衆生に悉く如來の法界あり、ただ一念の無明に由るが故に、常に目前にあれども、而も覺知せずと見たまふ。是の故に誠實の言を發す、我れ今要す當に種種の方便を設けて、善く一切衆生の爲に、眼瞶を決

(一) 初第九卷に  
は此の前に入佛三  
昧耶の眞言あり。  
(二) 阿三迷 Assume  
(三) 明囉三迷 Tris  
ame

除すべし、若し我が誓願必ず當に成就すべくば、諸の衆生をして、我が方便に隨ひて、此の誠實の言を説かん時、乃至一生の中に於て、無垢眼を得て、障蓋都て盡さしめんと。故に三昧耶と名く。警覺の義と言ふは、如來、一切衆生はみな無明の睡に在るが故に、是の如くの功徳に於て、自ら覺知せざるを以ての故に、誠言を以て感動して、醒悟することを得しめ、亦此れを以て諸の菩薩等を警覺して、深禪定の窟を起ちて、師子頻申を學ばしむ。若し眞言行人ありて、此の三昧耶を説かば、我れ等諸佛も亦當に本誓を憶持して、遠越することを得ざること、猶は國王の自ら法を制し已りて、還つて自ら敬順して之を行ふが如くなるべし。故に三昧耶と名く。持明とは、梵には陀羅尼と云ふ。明とは謂はく、一切の明門行を惣持して、乃至此の三昧耶誓願を盡す以來は、終に漏失せず、故に入佛三昧耶の持明と名く。

(一) 初の句は一切諸佛を歸命す、上に釋せるが如し。(二) 次の句に無等と云ひ、(三) 次に三等と云ふ、下の句に連ねて之を言はば、即ち是れ無等三平等の三昧耶なり。復次に阿は是れ諸法本不生の義、即ち是れ法界體性なり。娑は是れ諦の義、迷は是れ三昧の義、磨は是れ自證の太空、亦是れ我の義なり。世尊此の三昧を證したまふ時、一一



(二) 咄囉 三の義  
なれども 字義に  
依らば 咄は如々の  
義、囉の本體の羅  
は塵垢の義なるが  
故に、斯く釋せる  
なり。

の衆生の心中の普門漫荼羅、皆我れに等しと諦かに觀じたまふ、是の故に更に待對す  
べきなく、譬類す可きことなし、名けて無等とす。三等とはいはく、三世等しく、三  
因等しく、三業道等しく、三乘等しく、即ち是れ前の句を轉釋す、所以に無等の意なり。  
(三) 咄囉とは謂はく、心の如實の相は、一切の塵垢本來不生なり、三世の如來の種種の  
方便は、悉く皆此の一大事の因縁の爲の故なり。即ち是れ除障の義なり。結して三昧  
耶と云ふは、即ち是れ必定師子吼して、諸法平等の義を説く、故に大誓願を立てて、  
當に一切をして我が如くなることを得しむべし、故に普く衆生の爲に佛知見を開かん  
と欲するが故に、是の故に此れを以て衆生及び諸佛を警覺するが故に。是の故に此の  
三昧耶を名けて一切如來の金剛の誓戒とす。若し先づ念持せざらん者には、一切の眞  
言法事を作すことを得ず。世尊、一切の佛刹に遍滿せる身語心輪を以て、此の三昧耶  
を説きたまふこと已りぬ。一切の諸の佛子衆、之を聞かざることなし、既に是れを聞  
き已りて、一切の眞言法の中に於て、敢て違越せず。然る所心は、(三) 若し菩薩、衆生  
と諸法との中に於て、種種の不平等の見を作さば、則ち三昧耶の法を越ゆ、若し此の  
平等誓の中に於て、種種の限量の心を作さば、亦三昧耶の法を越ゆ。諸有の所作、世

(三) 若し等 三昧  
耶の四義に違反す  
ることを明す。

(二) 以上具論品疏  
(第九卷)の文。

(三) 經等 以下ま  
た上に引ける具  
品疏の文の讀きな  
り。  
(三) 法界生 入佛  
三昧耶は胎の如  
く、法界生は出胎  
の如し。  
(四) 世尊等 三昧  
耶に四義ある中、  
以下は平等の義に  
耶を釋す。

間の名利に隨順して、大事の因縁の爲にせざれば、亦三昧耶の法を越ゆ。放逸懈怠に  
して、其の心を警悟すること能はざれば、亦三昧耶の法を越ゆ。三昧耶の法を越ゆる  
を以ての故に、種種の障生することありて、自ら損し他を損して、義利あることなし、  
是の故に諸菩薩等、此の三昧耶を奉持すること、身命を護るが如くして、敢て違越せ  
ず。(三) 「能淨如來地」とは、眞言を念誦し、及び印を作さば、即ち能く煩惱と所知との  
障を除くなり。「地波羅蜜滿」とは、諸障を淨除することは、みな佛地の功德を出現す  
るを以てなり。「成三法道界」とは、印と眞言と及び意密となり。道界とは即ち是れ果  
なり、合して三法の果を成すと云ふなり。

「次結法界生」より以下は、第十一の法界生眞言門なり、是れ法の身を養ふ。此の中  
にも印と眞言と頌とあり。(三) 經に「薄伽梵また(三) 法界生の眞言を説きたまふ」と云へる  
は、(四) 世尊前に法界胎藏三昧に入りたまひし時、一切衆生に悉く菩提の種子ありて、  
諸佛に等同なりと見たまふが故に、入佛三昧耶の持明を説きたまふ。此の持明を以  
て、佛の平等の戒に入ることを得、即ち是れ聖胎藏に託するなり。その時に世尊、  
また普眼を以て、一切衆生は皆悉く聖胎具足して、佛家に生在す、その時に無盡の莊







また具緣品の文なり、前に引ける文の次の金剛薩埵の眞言を除きて、その次の文なり。

六、龍記 已上

切の金剛を歸命す、即ち是れ無量の門より、如來の金剛智を持つ者をして、みな憶持し護念せしむるなり。次に句に伐折羅咀麼句痕と云ふ、謂はく、我が身即ち金剛に同じ、即ち是れ法界の自性なり、大堅固力を成就して、沮壞す可からざるを以ての故に、異門を以て説きて金剛とす。如來は普眼を以て、一切衆生の金剛の智體は、我れと異なることなしと觀たまふ、是れ平等の義なり。衆生自ら覺知せざるを以ての故に、無量の金剛智門より、種種の金剛の事業を作して、要ず是の如くの大障を摧きて、實際に至らしむるは、是れ本誓の義なり。是の如くの實際を名けて、無垢眼金剛とす、即ち是れ除障の義なり。此の師子吼の聲を以て、十方の佛刹を震動す、即ち是れ警覺の義なり、故に三昧耶と名く。復次に眞言行者、初の三昧を以ての故に、如來秘密の身口意平等の身に同じきことを得、第二の三昧耶を以ての故に、如來加持法界宮の尊特の身に同じきことを得、第三の三昧耶を以ての故に、此の生身をして、みな金剛と作らしめて、無量の持金剛衆眷屬のために、而も自ら圍遶せらる。佛初の三昧耶を説きたまふことは、自受用の爲の故に、第二の三昧耶は、法性身の諸の菩薩を成就せんが爲の故に、第三の三昧耶は、隨類の衆生を折伏し攝受せんが爲の故なり。佛初の三

(二)以上具緣品疏の文。

(三)次等以下は上に引ける具緣品疏の續きの文なり。  
(三)金剛等果後の方便化他の人誓を金剛甲冑に譬ふ

昧耶を説きたまふことは、大悲胎藏の漫荼羅を建立せんが爲の故に、第二の三昧耶は、毘盧遮那の阿闍梨の事業を作さんが爲の故に、第三の三昧耶は、執金剛の弟子の事業を作さんが爲の故なり。初の三昧耶は、如來の眷屬を加持せんが爲の故なり、第二の三昧耶は、蓮花の眷屬を加持せんが爲の故なり、第三の三昧耶は、金剛の眷屬を加持せんが爲の故なり。是の故に、佛三三昧耶を説きたまふ(三)。「即是執金剛」とは、金剛薩埵是れなり。「勿生疑惑心」とは、修行者を勸めて、信心を定めしむ。

「次以眞言印」より以下は、第十三の金剛甲冑眞言門なり。亦頌と眞言と印とあり。初の二偈は惣じて印の德を現す、「是中密印相」より以下の一偈半は、正しく印相を顯す、次の二句は、結前起後なり。「無垢」とは覽字なり。(三)次に金剛鏡の眞言を説くことは、金剛薩埵の身を莊嚴せんが爲の故なり。行人已に金剛の誓願を發して、一切衆生の爲に、諸障を摧滅せんと欲するが故に、牢強の精進を以て、(三)金剛の甲冑を被る。且らく六波羅蜜の如きは、一一に如實相にして、みな金剛の破壊す可からざるが如し。又一度の中にみな五度を具せり、是の故に周體密緻にして、間隙あることなし、六度の如く、三十七品・十八空・百八三昧・五百陀羅尼等も、みな當に廣く説くべし。是



(二) 具緣品疏には此の前に金剛總の眞言あり。

(三) 最初等金剛即ち伐折囉に就て釋す、伐折囉は生不可得、折囉は生不可得、自性清淨の義なり。

(三) 次等甲冑即ち迦囉連に就て釋す、迦囉連は迦囉連の字相なり。

の如くの金剛甲を被るを以ての故に六道に旋轉して、生を出で、死に入れども、一切の煩惱業苦の傷ること能はざる所なり。若し淺略の説に就かば、行人此の眞言を以て、自ら加持するに由るが故に、一切の諸の天龍等、みな金剛薩埵の身に同じくして、遍體にみな金剛の甲冑を被て、堅密無際にして、光は猛焰の如くなるを見る、是の故に一切の障を爲す者、みな傷ること能はず。(二) 伐折囉は是れ金剛なり。迦囉連をば甲と名く。如來は金剛眼を以て、普く衆生を觀たまふに、此の金剛の甲冑を被ざるものなし、是の故に誠實の言を以て、之を演説したまふ。(三) 最初の囉字を以て眞言の體とす、囉は是れ諸法離言説の義なり、若し是れ戲論の言説所行の處ならば、悉くみな破る可く轉す可し、堅固なることあることなし、是の故に囉字を以て皆之を轉釋す。何が故ぞ諸法は言説を離れたる、生不可得なるを以ての故に、何が故ぞ生不可得なる、自性清淨なるを以ての故に、自性清淨なるは即ち是れ金剛薩埵の身なり。(三) 次に甲の義を明さん、若し法は是れ造作所成ならば、當に知るべし、ただ假名のみあり、義に従りて遷變して、尙ほ自ら其の性を固むること能はず、況や能く六塵の利箭を蔽捍せんや。今此の金剛の體の無盡莊嚴を觀するに、皆悉く諸の造作を離れたり、是の故に堅固不

(二) 定等昧字は下三昧の義あり、是れ定なり、是れ大空の慧なり、是れ定慧具足の字なり。(三) 以上具緣品疏の文。

壞にして、百非も干すこと能はざる所なり、是の故に名けて金剛甲冑とす。最後の囉字は、即ち是れ無所畏の聲なり、亦是れ自在力の義なり、亦是れ歡喜の義なり、(二) 定慧具足するを以て、此の叫字門を證する時、自ら必ず能く諸障を摧壞して、普く衆生を護れることを知る、是の故に大いに歡喜するなり。(三) 「囉字色鮮白」より以下は、第十四に囉字眞言門なり、亦頌と眞言とあり。初の一句は、所置の處を明す。此の中に初の一句は、字體の色相明淨なることを指す。次の一句は、字を莊る法用を明す、「如彼」とは金剛を指す。次の一句は、持誦者の安く所の囉の處を顯す。「設於百劫中」より以下の一句は、持誦者の所得の益を現す。囉とは是れ垢なり、上に點あり、是れ大空の義なり、謂はく、是れ垢を離れて大空に同じ、是れ法界心の義なり、亦是無垢の字と名く、「眞言同法界」とは是れなり、即ち謂はく、眞法界の以外、其の眞言は従りて來る所の處なし、故に下に無量の衆罪除けると云ふ、謂はく、眞言の徳用を顯すなり。「不久」等の二句は、持眞言者の所得の位を明す。「一切觸穢」等の二句は、持誦者の穢處に出入する時、以て身を嚴る法を明す。「赤色」等の二句は、囉字を圍繞する光焰の相なり、其の字は梵字を用て、供養儀式品に云ふに



(二)疏 第八卷に  
此の文あり。

約するに、現前に囉字を觀せよ、點を具して廣く嚴飾せり、謂はく、淨光の焰鬘、赫奕たること、朝日の暉の如しと。持誦法則品に曰はく、囉字は初日の暉の如くにして、形赤にして三角に在り、本心の位を加持す、是れを智火光と名くと。入漫荼羅具緣眞言品に云はく、頂に無垢の字を戴かしめ、嚴るに大空の點を以てせよ、周旋して焰鬘を開きて、字門より白光を生じて、流出すること満月の如しと。(三)疏に云はく、又彼れの頂上に一の囉字ありと觀じて、字の上に點をおくべし、故に嚴るに大空點を以てすと云ふ、此れは是れ囉字なり、此の四邊に遍く光焰ありて、猶ほ華鬘の如くして、連環して斷えず、字の中より又遍く白光を流出すること、淨満月の暉の如し、此の淨法界心に加持せらるるを以ての故に、能く内外の諸障を除くと。謂はく調益の義の故に。悉地出現品に云はく、第一攝除の相は、安くに大空點を以てすべし、囉字は眞勝眞實なり、火中の上と佛説きたまふと。(三)疏に云はく、次に囉字除障の漫荼羅を説かん、除障の中に於て、最も第一眞實の法とす、此の囉字は是れ亦赤の中の赤、火の中の火、燒の中の燒なり、能く種種の煩惱業苦を燒滅するに、乃至現に五無間の罪を作れるも、若し此の字門を修すれば、亦能く淨除して、遺餘あることなし、既に罪

(三)疏 第十二卷  
に此の文あり。

を除き已れば、則ち諸善功德を生ずと。出現の義の故に。

「次爲降伏魔」より已下は、第十五に無堪恐大護明門なり、亦眞言を誦することあり。此の中の降伏魔とは四あり、煩惱魔と陰魔と天魔と死魔となり。無能堪忍とは、魔鬼等の者、此の眞言を持誦する人を見ては、眼を開きて見んと欲すれども、見ることはせず、故に無堪忍明と言ふなり。漫荼羅の法事の時所要の、眞言支分門に、(三)「その時に毗盧遮那また、一切衆會を觀じて、執金剛秘密主等に告げたまはく」と云ふより以下は、漫荼羅の法事の時の、所要の眞言の支分を明す、阿闍梨宜しく解了すべし、故に次に之を説くなり。將に如來の語密の藏を顯示せんとするが故に、また普く大衆を觀て之を加持したまふ。(三)生身の佛の如きは、將に誠實の言を發せんとする時、或は廣長舌相を示して、遍く其の面を覆ひて、應度の者に告げて言はく、汝が經書の中に、もし是の如くの相ある人にして、而も虛妄の語を出すを見るや否やと。若し摩訶衍の中には、或は舌相を示して、遍く三千世界を覆ふ。今世尊將に如來の平等の語を説かんとするが故に、此の語輪、横豎にみな一切法界に遍するを以てす、故に廣長語輪相と曰ふ。此の相の字は、梵本には正しく漫荼羅と云ふ、前に已に普門の身漫荼羅

(二)その等 以下  
此の卷の殆ど末  
尾までは具緣品疏  
(第九卷)の文なり

(三)生身等 此の  
事智度論第八卷に  
出づ。



を開示したまひき、今また普門の語漫荼羅を開示したまふこと、如意珠の寂然として心なく、亦定相なけれども、而も能く普く一切に應じて、皆其の心を稱悦せしむるが故に、巧色摩尼と名くるが如し。巧色摩尼の身より、巧色摩尼の語を出し、巧色摩尼の心を示して、普く法財を雨らして、法界の衆生の種種の希願を満たす。是の如くの應物の迹、常に十方三世に遍して、無量の門を以て衆の徳本を植えて、窮まり已む時なし。住不可害行とは、即ち是れ一切事業の中に於て、皆悉く留難す可からず、破壊す可からざるの義なり、故に三世無比力の真言句と名く、此れは是れ惣じて諸の真言の出生する所の處を説くなり。下の文に至りて明す所の大力大護等は、即ち是れ如意珠輪より出す所の、稱機の用なり。之の時に一切の大衆、心器純潔なり、又如來の不思議の加持を蒙るが故に、大法を受くるに堪へたりと自ら知りて、即時に無量の門を以て、各共に聲を同じくして、佛に請ひて言はく、世尊、今正しく是れ時なり、善逝、今正しく是れ時なりと。梵本に據らば、前の時をば(一)迦羅と名く、是れ長時の時なり、一歳に三分等あるが如し。後の時をば(二)三摩耶と名く、是れ時の中の小時なり、晝夜六時の中に、更にまた少分ある等の如し。人ありて言ふが如し、今正しく是れ動作の時

(一)迦羅 Kalāra  
機と譯す。  
(二)三摩耶 Samāya  
時節と譯す。

なり、膏雨を獲るに遇へり、宜しく趣かに時に種を下して、其の機會を失はしむること勿るべしと。故に重ねて之を言ふなり。

その時に世尊、既に請を受け已りて、將に大力大護の明を説かんとしたまふが故に、一切の願を満たし、廣長舌相を出して、遍く一切の佛刹を覆ふ清淨法幢高峰觀三昧に住したまふ。此の中に出と言ふは、梵本を正しく翻せば、當に發生と云ふべし、舊譯には、或は奮迅と云ふ。此の廣長の舌相を出すことは、即ち是れ如來、大神通力を奮迅示現したまふが故に、會意して之を言ふなり。此の三昧は、如來の廣長の舌相の一切の佛刹に遍滿する、巧色摩尼普門の多用の中に於て、最も上首たること、猶は大将の幢の如し、故に清淨法幢と云ふ。梵には駄嚙と云ふ、此には翻じて幢とす、梵に計都と云ふ、此には翻じて旗とす、其の相稍異なり。幢はただ種種の雜綵を以て標幟し、莊嚴す、計都の相も大いに同じ、而も更に旒旗の密號を加ふ、兵家に龜龍鳥獸等の種種の形類を畫作して、以て三軍の節度とするが如し。ある一家、亦翻じて幢とす、故に合して之を言ふ、若し具さに梵本を存せば、當に清淨法幢旗と云ふべきなり。大将の高峰の上に幢旗を建立して、備さに山川に倚伏せる敵人の情狀を見て、百



萬の衆を指麾するに、動止齊一に、離合心に從ひて、以て戦へば必ず勝ち、以て攻むれば必ず取る、若し拙將は事勢に暗く、又幢旗を失ふ時は、則ち人各異心にして、敗るること踵を旋らさざるが如し。是の如く淨菩提心の、萬行の幢旗たることも、亦また是の如く、中道第一義諦の山の上に住して、安固不動にして、健行三昧を以て、普く十方を觀じて、悉く無量の度門の種性の優劣と、所應の用處と及び諸地の通塞と、障道の因縁とを見るが故に、能く無量の功德を攝持し、普く一切衆生を護る、凡てあらゆる所爲、沮壞す可からず。

その時に世尊、是の如くの念を作したまはく、我れ初發心より以來、常に此の勇健の菩提心を以て、正法と及び衆生とを護持す、種種の難處行苦行の事の中に於て、猶ほ金剛の如くして、退轉あることなし、正しく是の如くの三昧を成就して、普く十方諸佛の刹を護らんが爲めの故なり。今我れ所願皆已に満足す、作すべき所を作すことは、正しく是れ其の時なりと。即時に一切如來の法界に遍く、無餘の衆生界を哀愍する音聲を發して、此の持明の法句を説きたまふ。若し我が言ふ所誠實にして虚しからずば、其の誦持し修習することあらんものは、其の勢力をして、我れと異なることなからし

(一) 囉逝 古來 Rāhe と書けども男性の Rāhe を女性となすには末尾の he をはくはくとすべきが故に Rāhi なるべきか。

(二) 得 徳なり。

(三) 具緣品疏には此の前に大力大護の眞言あり。初の句とは南摩薩婆怛他薩婆訶なり (四) 次の句 薩婆 佩野微薩帝囉 (五) 次の句 微濕 縛日契囉

(六) 哈欠 Hanu Kham

めんと、故に大力大護と名くるなり。阿闍梨云はく、明とは是れ大慧光明の義なり。妃とは梵には囉逝と云ふ、即ち是れ王の字に女聲を作して之を呼ぶ、故に傳度の者、義を以て説きて妃とす。妃は是れ三昧の義、謂はゆる大悲胎藏三昧なり。此の三昧は是れ一切の佛子の母なり、此の佛子とは、即ち是れ清淨法幢の菩提心なり。彼の胎藏の始め、歌羅羅の時より、含藏し覆護して、衆縁の爲に傷られざらしめ、漸次に増長し、乃至誕育の後にも、猶ほ固く勤加守護して、之を乳養するが如し、故に母の恩最も深く、(二) 得に報す可きこと難しと説くなり。此の三昧より起つとは、入住出の時、皆是れ不思議法界なり、世間の禪定の動寂相礙へて、退失間隙の時あるが如きには非ず。(三) 初の句は一切の諸の如來を歸命す。(四) 次の句は能く一切の諸障恐怖等を除く、是れ一切如來の大力大護の徳を歎するなり。又(五) 次の句は無量の諸門を歎す、毗濕囉とは、亦是れ巧の義、謂はゆる無量の巧度門、即ち是れ法幢高峰觀三昧の普門の業用なり。今此の明妃を説かんと欲するが故に、先づ一切如來の是の如くの功德を歸敬す。次に薩婆他と云ふは、是れ惣じて諸佛の是の如くの功德を指す、同じく一字門に入らしめんと欲するが故なり。次に(六) 哈欠の兩字あり、正しく是れ眞言の體なり、亦是種



子と名く、已下の諸句はみな二字門を轉釋す。訶字は是れ因の義なり、謂はゆる大乘の因とは、即ち是れ菩提心なり、一切の因は本不生なるを以ての故に、乃至因縁を離れたるが故に、名けて淨菩提心とす、淨菩提心は是れ成佛の眞因、正法の幢旗の種子なり。上に空點を加ふ、是れ入證の義なり、所以に聲を轉じて哈カンと云ふ。佉キヤは是れ大空なり、上に點を加へて聲を轉じて欠ケンとす、即ち是れ此の大空を證するを、名けて般若佛母とす、正しく是れ明妃の義なり。此の虚空藏の中に於て、眞因の種子を含養す、即ち是れ大護の義なり。復次に佉キヤ字門は、猶ほ虚空の畢竟清淨なれども、有らざる所なきが如し、即ち是れ高峰觀所知の境界なり。訶字は是れ菩提幢なり、亦是れ自在力なり、此の二字相應するを以ての故に、猶ほ大將の能く怨敵を破るが如し。又訶字門は是れ菩提心の寶なり、佉字門の虚空藏と和合するが故に、巧色摩尼を成すことを得て、能く一切の希願を滿たす。今此の眞言の中には、此の欠字を闕ぐ、下の文には具さにあり。次の句に囉ラを灑セと云ふ、即ち是れ擁護の義なり。人の厄難を恐怖するに、若し有力の大人を恃怙し、或は高城深池の固めを得れば、則ち泰然として勞することなく、彼の諸の怨敵、種種の方便を以てすと雖も、之を若何イカニともすることなきが如

第七句 薩婆  
開帝 他 多 奔 呢 也 爾

く、行人も亦爾り、菩提心の王に依恃し、般若胎藏を以て城郭とすれば、猶ほ虚空の破壊す可からざるが如し、即ち是れ前の義を轉釋するなり。次の句に摩訶沫麗マカモレイとは、翻じて大力とす、訶字の菩提心に、一切如來の力を具足す、今佉字と合するが故に、諸の繫縛を離れて罣礙なきこと、虚空の中に風の自在に旋轉するが如し、故に大力と名く。又訶字の自在力と、佉字の無量の巧度門と合するが故に、猶ほ力士の千種の伎能を具足し、是の故に衆人能く勝つ者なきが如し、故に大力と名く。第七の句は大力の所由を釋す、故に一切如來の功德より生ずと云ふ。言はく、此の堅固の大力は、もと諸佛の金剛種性より生ず、又無量劫より以來、常に此の訶字の眞因を以て、佉字の萬徳を修す、一一にみな金剛の破壊す可からざるが如し、今衆徳已に滿ち、諸の力悉く備はれり、また當に此の法幢高峰觀三昧を以て、大いに法界の怨敵を摧き、普く衆生を護るべし。次に即ち誠實の語を發す、謂はゆる、訶カ字なり。訶は是れ彼れを恐怖せしむる聲なり、重ねて之を言ふ所以は、一には外障を摧き、二には内障を摧く。復次に外は是れ煩惱障、内は是れ智障なり。若し字門を釋せば、如來は何の法を以てか、諸障を恐怖したまふ、謂はく、此の訶字門を以てするなり。下に三昧の書あり、



即ち是れ具さに萬行を修するなり、上に大空點あり、即ち是れ已成の萬德なり、訶字は即ち是れ法幢旗なり、三昧と空點と合するが故に、即ち是れ高峰觀三昧なり。訶字は一切如來の種子を具する者なり、上の點は是れ明妃の母、下の畫は是れ胎分日に増加す、是の如くの義を具するが故に、適に聲を發する時、魔軍散壞するなり。次に但囉吒ラタと云ふは、尊れ叱咄ヒツツ攝伏の義なり。師子の奮怒して大いに吼ゆる時、衆獸のニ攝伏せざるることなきが如し。亦重ねて言ふことは、是れ根本煩惱と隨煩惱とに對す、乃至界内の煩惱、界外の煩惱に對するなり。末の句に阿鉢囉貳訶諦アハツラニカクタイと云ふは、是れ無對無比力の義なり、上の文を結持す。此の因縁を以ての故に、名けて大力大護の明妃とす。莎訶ツカとは是れ諸佛を警覺して、證明を作さしむ、亦是れ憶念持の義なり、前に已に釋せるが如し。

(一XIII)攝の字は儀の誤ならん。

經に云はく、「時に一切如來及び佛子衆、此の明を説き已りて、即時に普遍く佛刹六種に震動す」とは、謂はく、大日如來此の普遍法界の聲を發したまふ時、一切の諸佛菩薩、無二の境界なるを以ての故に、皆悉く同聲にて共に之を説きたまふ。今此の所加持の句は、威勢具足せり、又如來の誠諦の言を以ての故に、即時に十六の佛刹、六

種に震動して、以て佛の大誓眞實にして虚しからざることを明す。六種震動の義は、餘經に具さに其の相を説けり。今此の宗の秘密の釋の中には、六種震動とは、貪・瞋・癡・見・慢・疑の六の根本煩惱を謂ふ、一切衆生の心地は、常に此の重垢の爲に持たれて、自ら起ること能はず、今此の世尊の至誠に感動せらるるを以て、悉く皆甲折け開散して、佛種の萌生するが故に、六種震動と云ふ。

その時に一切菩薩、此の淺略深秘の二種の地動の因縁を見て、心目開散せざることなし、未曾有なることを得て、微妙の偈を以て、大日世尊を稱歎す。而して經に「諸佛の前に於て」と云ふは、謂はく、佛此の明を説きたまふ時、十方世界の諸菩薩等、各彼の佛の前にして、亦皆之を説きたまふ。是の故に同一の音聲を以て、俱時に領解す、即ち此の文に寄せて、大護の威力を證成するなり。領解の偈の中に、「諸佛は甚だ奇特なり」とは、具さに梵本を存せば、奇なる哉、一切諸佛、此の大力護を説きたまふと言ふべし、即ち是れ一一の世界の諸の菩薩、皆悉く同時に、十方の一切の諸佛の所説の眞言を領解するなり。十方の諸佛、共に護持したまふを以ての故に、猶ほ金剛城の重閣にして、高くして昇るべからず、又環らすに湯池を以てし、深くして越ゆべから



(二) Vinayaka 障  
礙者なり

(三) 以上具緣品疏  
の文。

ざるが如し。是の故に一切の諸障、侵陵すること能はず。「彼れに由りて心を護りて住す」とは、謂はく、諸の行人能く此の眞言密印を以て、身心を守護して住す、是の故に有らゆる障を爲す者、諸の(二)毘那夜迦・惡形の羅刹等、自然に退散す。此の住の字は、若し梵音に依らば、亦在の名なり、其の心に鎮在すとす。若し深釋を作さば、言はく、此の淨菩提心の人、此の明妃の實義を以て、心を護りて住す、是の故に三種の重障、諸の惡羅刹等、皆悉く馳散して、彼の善根を傷ること能はず、下至心に憶念を生ずる時まで、亦是の如くの力勢あるが故に。末の句は更に結成するなり(三)。「由緣今故」とは、初め南無より起りて、乃至莎訶まで、其の中間に於て、即ち纒と云ふ。「彼切」とは毘那夜迦の類なり。「馳散」とは、十方に馳せ散りて、去る處を知ること莫きなり。

### 國譯大毘盧遮那經供養次第法義疏卷上終

## 國譯大毘盧遮那經供養次第法疏卷下

零妙寺僧釋不可思議 撰

### 供養儀式品第三

將に此の品を釋せんとするに、亦四門を以て分別す、謂はく、初には釋名、二には品の來意、第三には宗趣、四には釋文なり。

初に釋名とは、行者の供養は聖海に合す、聖海歡喜して受く、初め一供を供ずるに、種種の供養聖海に滿つ、故に供養儀式品と言ふ。謂はゆる供養に三あり、一には外の供養、謂はく、香華飲食及び燃燈莊嚴道場等なり。二には行の供養、謂はく、説の如く奉行し、及び禮拜し持戒する等なり。三には理の供養、謂はく、心法體に住して、外の攀緣なきなり。

二に此の品の來意とは、前の品には、能く持戒の者を守護す、正しく供養の時なり、所以に此の品來れり。三に宗趣とは、心を盡して本尊を供養すれば、本尊領受したまふを以て宗とす、來世に作佛するを趣とす。

國譯大毘盧遮那經供養次第法疏卷下



(二) 此の中に百數十句及び文殊不動等の眞言あり。  
 (三) 此二句に攝せらるる中に於て文殊の眞言の次の十二句なり。  
 (四) 第二句に攝したる次に於て十六句及び召請の眞言あり。  
 (五) 前に於て十二句及び三昧耶の眞言なり。  
 (六) 前に於て八句及び閻伽の眞言の終りなり。  
 (七) 次の十六句及び如來座の眞言なり。  
 (八) 次の七十餘句及び四首の眞言なり。

四に文を釋すとは、亦二門あり、先づ攝頌を標し、後に別說す。其の攝頌とは三頌半なり。初の句に「是の如くの正業を以て其の身を淨む」とは、別說の中の、「現前に羅字を觀せよ」等の三偈半を攝す。第二の句に「定に住して本眞言の主を觀ず」とは、別說の中の、「最初に下位に於て」より「類に隨ひて相應す」までを攝す。第三の「或は諸佛勝生の子」等の二句は、別說の中の、「若しは觀世自在」より「前の法に依りて轉せよ」までを攝す。第四に「眞言と印とを以て而も召請せよ」の一句は、別說の中の、「次に眞言印を以て」より「不善心の衆生」までを攝す。第五に「先づ當に三昧耶を示現すべし」の一句は、別說の中の、「次に三昧耶を奉る」より「諸明を歡喜せしむるが故に」までを攝す。第六の「稽首して閻伽水を奉獻す」の一句は、別說の中の、「獻る所の閻伽水」より「三摩莎訶」までを攝す。第七の「行者また眞言座を獻せよ」の一句は、「別說の中の、「次に敷く所の座を奉れ」より「是れ即ち蓮華の印なり」までを攝す。第八の「眞言と相應して障者を除き、兼て不動の慧刀印を以てせよ」の二句は、別說の中の、「復次に當に辟除すべし」より「悉く能く普く之を護る」までを攝す。第九の「次にまさに香華等を供養すべし」等の四句は、別說の中の、「及び餘の供養

(一) 二十句及び香花等の眞言を超越して次の百三十句許なり。

(二) 四十句と虚空藏轉明妃及び次の八句なり。  
 (三) 十六句なり。

(四) 轉等以下は具緣品疏(第九卷)の金剛經の眞言を釋せる文なり、上巻にも引けり。

の具」より品の末の「誹謗して疑悔を生ずべからず」までを攝す。別說の中に據るに、初段には能觀の心の所住處、及び所觀の本尊の所住處を略して明す。第二段の中に五門あり、初の三頌及び三眞言は、是れ世界成就門、二に「是の輪に金剛の如く」より「阿字を其の中に置け」までは、是れ莊嚴道場門、三に「次に當に阿字を轉じて」より「自然に髮髻冠あり」までは、是れ成畫大日門、四に「若し釋迦牟尼」より「眞言者の居る所なり」までは、是れ成畫釋迦門、五に「若し妙吉祥を持せば」より「瞞字」までは、是れ成畫文殊門なり。初の門の「最初に下位に於て」とは、能く世界を成す風輪なり。「彼の風輪」とは、訶字を初めて安、所の半月の輪なり。「黒き光焰流布せよ」とは、則ち是れ訶字の光なり。訶字の眞言門の中に於て、訶字は是れ菩提幢なり、亦是れ自在力なり、大將の能く怨敵を破るが如くなるが故に、又訶字は是れ菩提心の寶なり、猶ほ摩尼王の如くして、能く一切の希願を滿たす。「次に上に」とは、能く世界を成す水輪なり。「水輪を安く」とは、轉字を安く所の滿月輪なり。雪乳とは滿月の色なり。「頗抵と月と電光」とは、縛字の色なり。轉字は是れ諸法離言說の義なり、若し是れ戲論言說の所行の處は、



(一) 以下は今の水  
輪を釋するに必  
要なけれども引  
續きの文なる故  
に引きたるなり。  
(二) 以上疏の文。

(三) 毘等 以下は  
大疏十一卷普通  
眞言藏品の終の文  
なり。

9 已上疏の文。

悉く皆破る可く轉ず可し、堅固あることなし。(一) 何が故ぞ諸法離言說なる、生不可得なるを以ての故に。何が故ぞ生不可得なる、自性清淨なるを以ての故に。自性清淨は即ち金剛薩埵の身なるが故に、堅固不壞にして、百非も于すこと能はざる所なり。(二) 「また水輪の上に於て」とは、地輪なり。「金剛輪」とは、阿字を安く所の四方輪なり。「本初の字」とは阿字なり、黄色とは阿字の色なり。毘盧遮那眞言心門に、(三) 毘盧遮那、眞言心を説きたまふとは、如上の諸の眞言等は、一一の中に隨ひて、則ち根本の眞言・心眞言・隨心眞言あるを以て、是の如く等、無量無邊にして數を知る可からず。いま惣じて説かば、眞言の心は即ち此の阿字なり、是れ諸法本不生の義なり、若し阿の聲を離るれば、則ち餘の字なし、即ち是れ諸字の母なり、即ち是れ一切の眞言の生する處なり。謂はく、一切の法門及び菩薩等は、みな毘盧遮那の自證の心より、衆生を饒益せんと欲するが爲に、加持力を以て是の事を現じたまふ、然も實に即體不生なること、阿字の法體に同じ。此の字は眞言の中に於て、最も上妙とす。是の故に眞言行者、常に當に是の如く受持すべし。是の故に一切の眞言は阿字に住す、此れに住するに猶るが故に、之を誦すれば即ち他の一切の字の徳を生ず。(四)

(一) 華は能く實を  
結び證は能く果を  
證す。  
(二) 亂脫

二に莊嚴道場門。「金剛の如し」とは、如理なり。「大因陀羅」とは、理二徳を具する義なり。「普く皆遍く流出す」とは、阿字より出す所の光なり。「彼の中に於て」とは、出す所の光なり。「導師諸佛子」とは、光所作の尊なり。「水」とは能觀の定なり。「白」とは本不生の理なり。「蓮」とは理は染着を離れたるなり。「妙色」とは理の光なり。「金剛莖」とは、理に非ざることなきなり。「八葉」とは、略して毘盧遮那佛の徳を現す。「具鬚髮」とは、恒沙の性の大悲なり。「衆寶」とは理の恒沙の徳なり。「常に無量の光を出す」とは、上の佛の放ちたまふ所にして、佛菩薩なり。「百千の衆の蓮繞れり」とは、化主の坐する所なり。右の三頌は、阿字の徳を現す。「其の上に」以下の四頌は、道場の莊嚴を顯す。「大覺の師子座」とは、即ち師子とは、能く煩惱を降伏する義なり。「寶王」とは能く衆生の願を満たすなり。「大宮殿」とは金剛法界宮なり、「寶柱」とは諸波羅蜜なり。「幢蓋」とは、幢は能く降伏し、蓋は能く利益す。「珠鬘」とは、方便波羅蜜等なり。「寶衣」とは過を離るる義なり、何を以ての故に、自ら過を離れ、他の過を離るるなり。「香」とは戒なり。(一) 「華」とは慧なり。「雲」とは變疑なり。「衆寶」とは布施等の四攝なり。「雜華」とは慈悲等の四無量なり。(二) 「地を嚴る」とは、佛智を生成



して住持するが故に。「繽紛」とは繁布の義なり。「諸韻所愛聲」とは、ただ寶あるのみに非ず、能く常樂我淨の聲を出す。「諸の音樂」とは、聞く者耳根を淨むるなり。「賢瓶」とは有る所慧に非ざるることなし。「闕伽」とは能く煩惱の垢を洗ふなり。「寶樹王開敷」より以下の二頌は、能化の主の徳を顯す。初の句は直ちに能化の主を顯す。「摩尼燈」とは閻浮金の色の如くなる等なり。「三昧」は是れ定なり、「惣持」は是れ慧なり三昧惣持は即ち是れ地なり。「綵女」とは般若智なり、智は能養の義なり。「佛波羅蜜」とは佛部の眞言なり。「等」とは金剛を等取す。「菩提妙嚴華」とは、蓮華部の眞言なり、菩提は所覺なり、妙嚴華は能覺なり。「方便」とは機に應ずるなり。「衆伎」とは能説なり。「妙法音」とは諸尊の眞言なり。「以我功德力」より以下の一頌は、自他の法力の徳を顯す、知るべし。右は深祕の道場の莊嚴を釋す、淺略の釋は知るべし。發願して上の所説の如く、心を盡して本尊に供養したてまつり、次に眞言を誦じて印を作せ。次に虚空藏轉明妃眞言門を釋せん。經に「その時に如來また、虚空等力虚空藏轉明妃の眞言を説きて曰はく」と曰ふは、猶ほ虚空の破壊すべからざるが如し、一切能く勝つ者なし、故に虚空等力と名く。又藏とは、人の大寶藏ありて、欲する所の者に隨

ひて、自在に之を取りて貧乏を受けざるが如く、如來の虚空の藏も亦また是の如し、一切の利樂衆生の事、みな中より出づ、無量の法寶、自在に取り用ふるに窮竭なし、故に虚空藏と名く。「轉明」とは、轉は是れ能生の義なり、能く此の藏を生じ、能く一切の佛事を生ずるなり。前に發す所の悲願の如く、謂はく、一華を以て供養する時の如く、運心して一切の佛及び凡聖に遍して、みな獻じ已りて、即ち一切智智に廻向す、諸の我が施を受くる者は、願はくは此の力を以て、我れをして如上の願を得しめん。是の如く願ひ已りて、此の眞言を以て之を加するに、成らざるることなし。初に禮敬一切如來等巧門等、亦是れ種種サラ、カテ一切ケン、空なり上に通して言はば一切皆ウ、ド、キヤ、イ、生なり虚空なり此れは是れ種子の字なり薩喃他ナリ欠ケン空ナリ此レは是れ種子ノ字ナリ摩特揭帝空藏なり薩泮囉醯門普迴ギヤ、キヤ、ナウケン此れ即ち虚空等力の義なり、一切法空の中に於て、此の物を生じて、普く一切衆生を益す。此れを誦持すれば、一華を以て奉獻するに隨ひて、法界に遍せしめ、上は一切の賢聖に獻じ、下は一切の有情に施し已りて、中に於て如上の大願を發して、此の眞言を以て之を加するに、みな成就することを得、藏の中より自ら寶物を取るに、心に隨はざることなきが如し。此れを誦すること三遍すれば、思念する所に隨ひて、彼れも亦成就す。凡そ獻ずる所の華等は、三種の力を以て廻向



して、而も此の明を以て之を加するに、一切意に随ひて成る、謂はく、華を以て一切の佛等に獻するに、自在に成就するなり。「此れに由りて一切を持す」とは、此れとは眞言印なり。一切とは所願供養なり。「眞實」とは、金剛法界宮の中の供養の如し。「一切法不生」等の二句は、阿字の義を現す、「想念」とは、能觀の心なり。「其の中に置く」とは、八葉の蓮の中臺なり。

三に成畫大日門をいはば、「次に當に阿字を轉すべし」とは、次とは、本不生の法は、言を絶し相寂に、心行も亦滅す、言を假りて強て言はば、大悲の法は機に應じて顯現す、謂はく、即ち能現の阿字なり。次に兩足の衆生に應じて、兩足の爲の故に、即ち阿字を轉じて兩足尊と成す、故に次に當に阿字を轉じて、大日牟尼と成すべしと言ふ。「圓光」とは、大日の圓光は猶ほ明鏡の如し、明鏡の中に於て、みな萬物を現す、何に況や塵垢本不生なる如來の圓光をや。「千界」とは、三千大千世界なり。「増數」とは、大千を一數として、乃至不可說不可說の光焰なり、謂はく、(二)所致の法なり。「流出」とは、大日の放ちたまふ所なり。「輪」とは具徳の義なり、謂はく、煩惱を降伏して、義牙を生ず、故に輪と名く。「光明」とは身業なり、「開悟せしむ」とは口業なり、

(二)所致の二字未だ兼ならず。

(一)聖善寺三藏善無畏三藏も洛陽の聖善寺等に住せり、故に聖善寺三藏と稱す。

(三)婆字種子の字Brahmなり。

(三)婆有の義に二點を加ふれば飛Brahmとなる。

故に「身と語と一切に通す」と言ふ。「閻浮金の色」とは、閻浮河より金を出す、此の河は近く閻浮樹の側にあり、此れに由りて名を得たり、金の中に於て最も勝れたり。「跏趺して坐す」とは、凡そ坐は(一)聖善の寺の三藏和上の邊にして面のあたり受く、左の足を先づ右の脛の上に着け、右の足を次に左の脛の上に着くるを蓮華坐と名く、單足を左の脛の上に着くるを、吉祥坐と名く、此の坐に別なるは、聖坐には非ず。若し菩提を求めんと欲すれば、佛坐を學ぶべし、爲に得ん。「正受」とは、入定の相なり。「諸毒」とは三毒の相なり。「絹縠衣」とは金の羅文なり。「自然に髮髻冠あり」とは、人の作に従るには非ず。

四に成畫釋迦門をいはば、「彼の中」とは、八葉の蓮の中臺なり。(二)「婆字を想へ」とは、梵字を彼の臺に安くなり。「勤勇」とは佛の異名なり。「袈裟」とは乾陀色なり。「四八」とは佛の三十二相なり。釋迦の種子心眞言門に、(三)「婆は是れ三有、傍に二點あり、即ち是れ三有を除遣する義なり。「瑜伽者」とは、行者の能觀の心と所觀の本尊と、相離れざるが故に、能所別なるが所には有相觀なり、行者の身心即ち是れ佛なるが故には、無相念誦門なり。「入」とは解なり、「本體」とは、放つ所の化身即ち是れ大日尊なるが故に、體用別なきが故に。涅槃經に曰はく、化身即ち是れ法身なりと、此れ其の



(二)菩薩等此の  
一句未審、經文に  
於佛右蓮上、當觀  
本所尊とあり。

(三) 瞞 Mani

義なり。「流出」とは、若しは多、若しは少、皆亦是の如し。「佛の右の蓮の上に於て」とは、(二)菩薩を本尊とすることを得るは、自ら本尊なり。「執」とは手の中に金剛あるが故に、執金剛と云ふなり。「前後の華臺の中」とは、ただ前後のみに非ず、亦乃ち左右も亦得。何の故ぞ、菩薩大眷屬は方所あることなきが故に。金剛の眷屬はただ左右方のみに非ず、亦乃ち十方も亦得。何の故ぞとならば、金剛の内眷屬は、如來の内徳なるが故に。問ふ、若し是の如くならば、何の故に方ありと説くや。答ふ、畫に約するに、處と事と限あるが故に、是の故に經に云はく、十方の菩薩、所來の方に從ひて結跏趺坐して、説法を聽聞すと、金剛も亦爾り、用心して思量す可し。「眞言者」とは念誦の人なり。「居る所」とは、畫像の地の右下の角に於てするなり。問ふ、要す須らく佛を畫さ畫さしむべきか。答ふ、不也、力ある者は畫さしむることを得、力なき者は單に本尊を畫くことも亦難し、何に況や畫さしめんや。

五に文殊種子眞言門をいはば、「中」とは八葉の華臺なり。「無我の字」とは梵の(三)瞞字なり。問ふ、何の故に文殊師利菩薩を以て、佛の次に説くや。答ふ、三藏和上の邊にて、面のあたり受けたり、諸佛の甚深の智門なるが故に、佛部の中に攝することも

(二)以下は疏第十  
卷眞言藏品の菩提  
行等の種子を釋せ  
る文。  
(三) 以上疏の文。

亦得、蓮華部の中に攝することも亦得、是の故に佛の次に列ぬるなり。(三)瞞は文殊なり、本體は即ち是れ空なり、上の點は是れ空門なり、謂はゆる大空なり。十八空を越えたるを、名けて空とす、空の位に住するを名けて大空す。(三)

三段の中に二門あり、先づ衆を列ぬ、次に「心を喜ばしめんが爲の故に」より「類に隨ひて相應す」に至るまでは、印眞言結界等を顯す。「心喜」とは、行者供養を爲すに因るが故に、福を得るを以て、聖者心に喜ぶ、是れ聖者供養を得るが故に、心喜ぶには非ず。「奉獻」等の三句は、別本の法則に依る、謂はく、供養眞言等を出すなり。若し自の法なくば、不動に依りて去垢せよとなり。「辟除」とは障を碎くなり。「光顯ならしむ」とは、香等の上に加持するに香の眞言を用ふるが故に。「本法を以て自ら相加し、及び我が身を護持す」等の三句は、(三)別本に自ら護身等の法あり、護身等に若し別の法なくば、此の法を通用すべきが故に、「或は降三世を以てす」と言ふ。「及」とは諸相別なる義なり。何を以ての故に、香の眞言と護身の眞言と別なるが故に、及と言ふ。「召請」等の四句は、別本に自ら法に依りて用ふることあり、若し別の法なくば、此の通法を用ひよ、故に「及び此の普通印」等と言ふ。

(三)別本準提儀  
軌に本尊の根本  
印及び烏瑟沙摩  
印言を以て、護身  
なすを等是れなり



(二)時等 以下疏第十卷普通眞言藏品の不動の眞言を釋せる文。

(一)戰 運變の〇に空點を加ふ。  
(二)茶 怨對のDに阿字を加へたる行の義と云ふ。故にHは笑ふの義なる故に喜の義と云ふ。  
(三)Ru は魔垢のRaにuを加へたるものなり。  
(四)惡性鈍の字字(六)摩訶論の字字(七)摩訶論の字字(八)薩婆論の字字を合して行の點を加ふ。

聖者不動眞言門を云はば、(一)時に佛、又また一切の障をなす者を息めんが故に、火生と名くる三昧を證して、此の大摧障の眞言を説きたまふ。此の眞言に大威勢あり、能く一切の眞言の行を修する者の種種の障難を除く、乃至佛、道樹に在しし時、此の眞言を以ての故に、一切の魔軍、散壞せざるることなし、何に況や世間の諸障をや。又此の障に二障あり、一には内障、謂はく、自心より生ず、其の類甚だ多し、詳かに説く可からず。二には外障、謂はく、外事より生ず、亦甚だ多し、皆能く摧滅す。戰茶極惡なり謂はゆる暴惡の摩訶盧瑟擊なり。娑頗吒也。破壞の怖なり但囉迦なり。堅固の哈漫。後の二字を以て種子とす、諸の句義は皆此れを成就せんとなり。初に戰茶とは、(一)戰は是れ死の義なり、阿字門に入れば、即ち是れ本より生死せざる義なり。(二)茶は是れ戰の義なり、此の無生死の大勢の主を以て、諸の四魔と戰ふなり。次に摩は吾我の義なり、阿字門に入れば、即ち無我なり、亦是れ空なり。(三)阿は是れ喜の義、亦是れ行の義なり。(四)盧に羅字あるは是れ垢障なり、廓の聲あるは是れ三昧なり。(五)瑟とは即ち奢摩他、謂はく三昧なり。(六)擊は是れ第五の字、即ち大空三昧なり。(七)薩は是れ堅の義、頗は是れ沫の義、世間は聚沫の如しと了知するが故に、破散し易し、傍に阿字の點あり、即ち

(一)吒 嚙のTa字  
(二)也 乘のYa  
(三)恒 如々のTa  
(四)囉 魔垢のRa  
(五)迦 作業のKa  
(六)哈 Ham  
(七)鏝 Main

(八) 以上疏の文。

(九)阿等 以下は疏第十三卷密印品の如來鈎印を説ける文。

行なり。(一)吒は是れ戰の義、能く敵陣を怖して破壊せしむるなり。(二)也は是れ乘なり。餅は是れ大空行三昧なり、上に説けるが如し。(三)恒は是れ如如なり。(四)囉は是れ無垢なり。(五)迦は是れ作なり、謂はく、一切法無作なり。(六)哈字は阿は是れ行の義なり、又阿の聲あるは是れ魔障を怖す金剛三昧なり、點は即ち大空なり、此の大空不動の行を以て、大いに一切の障魔を恐怖せしむるなり。(七)鏝字の摩は是れ我の義なり、阿字門に入れば即ち無我なり。又此の大空無我の三昧を以て、衆魔を怖す、此の字にも亦阿の聲及び點あるを以てなり。訶囉哈鏝の四字に、みな阿の聲あり、即ち是れ無行無垢なり、重重に魔を怖す、内外の二障を極めて怖す義なり。右聖者不動主の眞言了りぬ。(八)

四段の中に、頌眞言印あり。「次に眞言印を以て」より、「不善心の衆生」に至るまでは、召請方便眞言門なり。南麼三曼多勃駄喃。一切の諸佛(九)阿行(十)薩囉但囉鉢囉底訶諦切(十一)害せらる(十二)但他揭多(十三)來矩奢(十四)苦提浙囉耶(十五)苦提行(十六)鉢囉布囉迦(十七)此の中の行とは、謂はく、此の行に由りて能く諸佛の大功德を招くなり、世間の鈎の如きは、則ち處所分劑あり、一切の處に遍く鈎召を作すこと能はず。いま如來の鈎は則ち是の如くならず、普く一



(一) 以上疏の文。

(三) 右等以下は疏第九卷具緣品の闍伽の眞言を釋せる文なり。

(四) 伽行のG字

切に及ぼして加せざる所なく、乃至能く大菩提の果を召く。要を以て之を言はば、悉く一切如來の功德を滿して、普く一切衆生を召して、亦此の道を得しむ。故に次の句に遍一切害と云ふ、害とは即ち是れ鈎取して之を殘ふなり。遍く一切の不調伏の者を害して、みな菩提の行に於て、妙果に趣きて満足することを得しむ。(二)

第五の三昧耶眞言門の段の中に、印と眞言と頌とあり。「諸明」とは本尊なり。

第六段の中に頌と眞言とあり。「先づ以て具さに嚴備す」とは、虚空藏轉明の印を以て、衆の香華・五穀・五藥を以て、運心の中に嚴備するなり、現事の嚴備は知る可し。

「本眞言印を以て」とは、不動尊の印眞言なり。闍伽の眞言門をいはば、(三)右の句義の中に、伽伽那ガヤナは是れ虚空の義、娑摩サマは是れ等の義、阿娑摩アサマは是れ無等の義なり、謂はゆる、虚空に等しくして、等しきもの無きなり。如來の法身は本性淨なるが故に、無分別なるが故に、無邊際なるが故に、虚空の等同なり。然もまた無量無邊の不思議の功德あり、彼の虚空の能く譬喩する所に非ず、故に無等と云ふなり。復次に阿娑摩アサマは是れ不等の義なり、不等とは謂はゆる二乘なり。今既に虚空に等同なるを以て、又此の無等に等しきが故に、等虚空無等と云ふ。此れは最初の(三)伽字ガヤナを眞言の體とす、衆

(二) 以上疏の文。

(三) 阿等以下は疏第十卷眞言藏品の菩提行等の種子を説ける文。(四) 以上疏の文。

(四) 供養等今の品には今經の眞言藏品には供養なり。

生界の中の、來去の相も亦不可得なり、法界の中の來去の相も亦不可得なり、如來も如去も不可得なるを以ての故に、名けて大空とす。此の大空性淨の水を以て、用て無垢の身を浴す、是れを闍伽眞實の言とす。(二)

第七段の中に、頌と眞言と印とあり。「最勝の菩提を證す」とは、能修行者の所得の果なり。如來座眞言門をいはば、(三)阿は是れ障なり、傍に二點あり、即ち是れ除遣なり、此れ即ち除蓋障の義なり(三)、此れを以て座とすれば、畢竟して一切の障を起さざるが故に。何の故にか阿字は是れ障なる、阿字は能く障を除けばなり。

第八段の中に四あり、初に「復次に當に辟除するに」より「盡く餘あることなからしむ」に至るまでは、不動尊の印眞言の徳を明す。「自身所生の障」とは、妄想所生の内外の障なり。二に「智者當に轉じて作す」より「金剛薩埵の身と作る」までは、金剛薩埵の身を成す門なり。智者等の一頌は、惣じて金剛薩埵の身を成すことを明す。金剛の種子心門をいはば、鍍字ダクジとは所轉の梵字なり、鍍字は自性清淨の心、金剛の種子の字となる、故に「諸法は言説を離る」と言ふ。問ふ、何を以ての故に、(四)供養法の中には上に點を置き、經本には傍に二點ありて、二共に金剛の種子なりと云ふや。答ふ、供



養法は自體なり、經本は法の大用を顯す、是の故に二共に妨なし。「離言說」とは、鏡字の義なり。「印を具す」とは、能く薩埵を成し生ずる印なり。「等」とは鏡字なり。「當に知るべし」已下の二頌は、能所作の印なり。金剛薩埵の眞言門をいはば、南麼三曼多伐折囉報命するなり。戰擊一切の金剛に歸せん。此れ暴摩訶路灑報大忿怒のウッ怖戰茶なり。生死を離るるを謂ふ。は上に點あるは是れ大空なり、言はく、此の生死は大空に同じ。茶は是れ戰敵なり、生死を離るるに猶りて、大空に等し、是を以て能く之に對する者なし。句義をいはば、戰茶は是れ暴惡なり。摩訶路瑟擊大忿怒なり、上に説く所の如く能く敵する者なし、所以に大忿怒なり。餅餅を具するなり。如上の法を以て衆生を恐怖して、生死を離れて三解脱を得しむるなり。問ふ、第二品の中に、金剛薩埵の印眞言を説けり、其の義云何。答ふ、第三品の中には、金剛の自體を成す、第二品の中には、此の金剛の轉法輪の用を現す。問ふ、云何が知る。答ふ、金剛の種を説きては、智者當に轉じて金剛薩埵の身と作るべしと云ひ、次に欠字を説きては、即ち言はく、先づ此の字門に住して、然して後に金剛薩埵の身と作るべしと、是に知る、未だ金剛薩埵の身と作らずば、轉法輪の印眞言を作すべからざるなり。問ふ、何の時に金剛の身と作る。答ふ、入佛三昧耶の前に、五字等の身と作らしむ。金剛薩

(一) 欠。或 Kham は法 Kham に空點目を加へたるもの。

(二) 此等 以下は疏第十三卷密印品の怖魔印を説ける文なり。

埵の眞言とは、印を作して誦する所の眞言なり。「半金剛の印を作す」とは、右の手に暇なくば、半に作すことも亦得。「餘の契經」とは、別本の經なり。金剛鏡の字は、護持の印を用て身を護りて、金剛の鏡と成る。前に已に説けるは護持の印なり。「佉字及び點」とは、金剛の頂上に著ける所の欠字門なり。右たゞ金剛の莊嚴する所の身のみならず、念誦の行者も亦莊嚴す。欠字門の眞言に、欠とは大勤勇の種子なり、佛道場に坐して、諸魔を伏したまふが故に、一切天人號して大勤勇とす、即ち毘盧遮那なり。(一) 佉は是れ空の義なり、上に點あり、是れ大空なり、大空を以て一切の空を淨じ。南麼三曼多勃駄喃前に同じ

三に「次に應に一心を作すべし」より、「必定して皆退散す」までは、魔を降伏する眞言門を明す。「次に應に」等の二頌は、惣じて覺を成ずる金剛行者の身なり。降伏眞言門をいはば、(二) 此れ一切佛の大印なり、能く如來威猛の大勢の力を現して、一切の障難をなす者を恐怖し、其れを降伏せしめ、亦能く一切衆生の所願を與ふ。行者此の印を結ぶ時、障難を爲す者、四方に向ひて馳せ散り、乃至大力の天魔の軍衆も、亦退散せざることなし。如來菩提道場にして、此の印を以て能く諸魔を伏したまふ。眞言、







(一) 以上疏の文。

(二) 六陀羅尼不動尊と五供養との六なり。

を以て莊嚴とす、更に過上なし。此は是れ諸佛の大界なり。(一)  
第九段の中に二門あり。初に「或は不動尊を以て」より「悍」に至るまでは、惣表成辨門、二に「次に先づ恭敬して禮す」より「摩訶沫履莎訶」に至るまでは、廣明營辨門なり。  
(三) 六陀羅尼あり、知る可し。初の中に、不動尊種子心真言門をいはば、悍の訶は是れ行なり、阿の聲は又是れ行なり、點は即ち大空なり、是の位に住するに由りて、能く一切を降して、菩提心のために大護と作る。

二に廣明營辨門の中に、「經に説くが如く香等」とは、種種の香・華・五寶・五樂・五穀を用て、獻する所の闍伽水の中に加へて、數々密印を以て之を瀉ぎて如法にせよ。所持の闍伽水の中に、不動尊の慧刀の印を用て、闍伽水の中に瀉して、あらゆる供養の中に水を瀉ぐなり。「また類りに真言を誦す」とは、水を瀉ぐ時、不動尊の真言を誦するなり。「各本真言を説く」とは、香等の真言なり。「及び自ら持つ所の明」とは、念誦者の本尊の真言なり。「名を稱へて」とは香等なり。

塗香真言門をいはば、(三)次に塗香等の六種の真言あり、皆是れ漫荼羅に入りて、供養を修する時の所要なり、故に此の品の中に於て説きたまふ。(四)右句義の中に、微輪

(三) 次等以下は疏第九卷具緣品の六種供養の真言を釋せる文なり。  
(四) 疏には此の前に塗香の真言あり

(一) 以上疏の文。

(二) 右等 疏の右の文の續きなり。但し疏は此の間に華の真言あり。

(三) 莽 思の梵語は Manas なるが故に其の頭字 Man を心の義と云ふ。

馱は是れ淨の義なり、健杜は是れ香なり、納婆囉は是れ發生の義なり、謂はゆる淨香發生なり。句の初の微の字を以て體とす、嚩字の上に於て伊字の畫を加ふ、是の故に聲を轉じて微とす。嚩字は是れ金剛の義、離言説の義なり、三昧は是れ住の義なり、是の如く定慧均等なるは、即ち是れ住無戲論執金剛の、三世無障礙智戒なり。是の如く戒香は其の性本寂にして、無去無來なり、而も常に法界に遍滿す、故に淨塗香と名く。一切の衆生も、また等しく共に之を有すと雖も、然も未だ發心せざるを以ての故に、此の香未だ發せず、我れいま已に此の戒香を用て、遍く法身に塗るが故に、能く淨香を以て、普く一切に薰するなり。(二)

心蓮華真言門をいはば、(三)右の句義の中に、摩訶妹咀囉也は是れ大慈の義、毘盧娜葉帝は是れ生の義なり、謂はゆる大慈生なり。妹字を以て真言の體とす、即ち是れ莽字に三昧の畫を加ふ、是の故に聲を轉じて之を呼ぶ、(三)莽は是れ心の義、我の義、亦は大空と名く。言はく、此の心蓮華は妄我の爲に纏はれて、增長することを得ず、今自ら心の實相を證知するが故に、慈悲藏の中より、八葉鬚藥次第に開敷す、故に大慈より生ずと曰ふ。復次に淨菩提心の樹王の種子、慈悲地の中より滋長し茂盛して、萬德



(二) 以上疏の文。

(三) 右等 疏の右の文の續きなり、但し疏には此の間に焼香の眞言あり

(三) 以上疏の文。

(四) 右等 以下は疏の右の文の次の飲食の眞言の釋を越えて燈明の眞言を釋せる文なり。

の華を開き、方便を以ての故に實を成す、故に大慈より生ずと曰ふなり。當に字門を以て廣く之を釋すべし。(二)

焼香眞言門をいはば、(三)右の句義の中に、達摩駄都とは是れ法界の義なり、弩藥帝は是れ隨生の義、亦是れ遍至の義、亦是れ逝の義、進みて住まらざる義なり、譯して遍至法界と云ふなり。句の初の達字を以て體とす、衆世界本不生なるを以ての故に、乃至法界の定相も亦不可得なり、是の如く法界は深廣無際にして、度量す可からず、而も瑜伽行人、恒に殊勝に進みて休息せざるが故に、身語心業悉く是の如く法界に遍す、下は一華を以て佛を供養する時に至るまで、亦是の如く法界に遍す、即ち是れ焼香の義なり。(三)

燈明眞言門をいはば、(四)右の句義の中に、怛他揭多是是れ如來なり、唎旨とは是れ焰明なり、次に薩巴羅憐とは是れ普遍なり、阿囉婆娑娜とは是れ諸暗なり、伽伽羅陀哩耶とは是れ限量なく虚空に等しきなり。意は言はく、如來の焰光は普く諸暗に遍す、虚空に等同にして限量あることなしと。此の眞言は句の初の多字を以て體とす、心の實相に如ふは即ち是れ毘盧遮那の大智光明なり、普く諸暗を照して遍せざる所なし。

(二) 以上疏の文。

(三) 右等 疏の右の文を立返りて飲食の眞言を釋せる文なり。

(三) 阿羅羅には塵垢の羅字二ある故に斯く言ふ。

諸暗と言ふは、即ち是れ無明なり。無明本不生なるを以ての故に、體即ち是れ明なり、是の故に如來の光明は、普く諸暗に遍せり。等虚空と言ふは、無明は虚空の無量なるに等しきを以ての故に、如來の智光も亦虚空の無量なるに等し、乃至老死は虚空の無量なるが如くなるが故に、如來の智光も亦虚空の無量なるが如し。十二因縁の如く、一切諸法も亦是の如く説くべし。是の如く決定の義をば、名けて燈明の眞言とす、此れを以て燈明を加持して佛を供養せよ、即ち是れ諸の供養の中の最なり。(二)

飲食眞言門をいはば、(三)右初に阿羅羅と云ふは、聞くことを可みし樂はざる聲、不善の聲の義なり、人の高聲に喧聒して、聽聞者の心を寂靜ならざらしむるが如し、次に迦羅羅と云ふは、是れ前の不善の高聲を止む、是れ恬實寂泊の義なり、此の中には、正しく法喜禪悅を以て食の義とす、是の故に此れに寄せて之を言ふなり。若し字輪の相に就かば、阿は是れ本初の義なり、本初あるを以て、則ち(三)二種の塵垢あり、謂はく、煩惱障と智障となり、此の二種の塵垢に由るが故に、則ち戲論誑語の聲あり。今諸法本不生なるを以ての故に、二種の塵垢も亦本不生なり、即ち是れ甘露の門を開きて、涅槃の飯を成す、故に阿羅羅と名く。復次に若し人萬行を勤修して、是の如くの



(二) 造作等 迦羅  
羅は作業の迦羅  
と摩垢の羅ハを  
二字と合せたる語  
なるが故に斯く言  
ふ。

(三) 以上疏の文。

法味を得んと望めば、(二)造作あるを以ての故に、二障還つて生ず、是れ常命色方の眞の甘露味に非ず。今諸法は造作なきを以ての故に、内證の味、他に從りて得ず。乳糜を食ふが如きは、更に比ぶる所なし、故に前の不善の聲を止むと云ふ。沫隣捺頭ハツリンダツトとは、凡そ西方の享祭の食は、上は諸佛に獻じ、下は鬼神に及ぶまで、通じて沫梨ハツリンと名く。其の句義に云はく、我れ飯を以て奉獻すと。次に沫隣捺泥ハツリンダツイとは、此の意は言はく、我が獻する所の食を受けて、食し已りて、當に還つて我れに妙食を與ふべし、世間の人の餽膳を以て奉獻して、福田に施して、今世後世に飯食の乏しきこと無からしめんが爲なりと云ふが如し、故に今無盡の法食を以て、世間の供養を加持して、諸尊に施し奉る、還つて當に我が所願を満して、常に不死不生の味を充足せしめたまふなり。次に摩訶沫履マカハツレとは、即ち是れ諸食の中に倍加廣大にして豊なり。此れを以て上の句を料簡するに、我れ今獻する所及び祈る所は、みな極めて比なき味、上に過ぐるることなき味に在り、有量の食を求めずと云ふなり。(三)

第十段の中に、「及餘」とは、力あらん者はただ五種の供養のみに非ず、亦廣大の供養あり、謂はく、四海の水を蓮池と作り、青白紅の蓮華を建立して、清淨の香食、心

の測る所に非ず、清淨の山水草木の華、香美の菓子、極樂に比し、虚空に等し、香雲を放ちて大地に遍滿し、幢蓋を建て、摩尼の寶樹大地に滿す。上の種種の供養の具を以てす、故に「及び餘の供養の具」と言ふ。「此の法則に依隨す」とは、不動尊なり、「是れ則ち衆物を持つ」とは、運心して供養するなり。樂欲して佛を供養する者、即ち普通供養の印を作せば、願ふ所みな成就するなり。「平等なること法界の如し」とは、理に如ふなり、亦是契當と言ふ。「普く諸趣の中に入る」とは、入とは趣入なり。「福德より而も生起す」とは、問ふ、運心より生ずるか、佛菩薩より生ずるか、亦是眞言印より生ずるか。答ふ、獨より生ずるに非ず、和合して生ず、故に能生と名く。「幢幡」等より、「供養して佛事を成す」に至るまでは、所生なり。「各雨らす」とは、一一の供養物は雲を成し、一一の雲は轉じて諸の供物を雨らす、是の如く展轉して窮盡す可からず。何を以ての故に、理より生ずる所なるが故に、理窮盡なきが故に。「思惟」とは、供ぜらるる本尊なり。「虚空藏の明を以て」とは、能く供養を出す法なり。「三轉」とは三遍なり。「持虚空藏の明」より、「功德自ら圓滿す」に至るまでは、功德藏を顯す。「虚空」とは理の虚空なり、「藏」とは能出能藏なり。「増加の句」とは、能の義を顯す。「隨



時」等の二句は、道心ある劣慧の人なり。「此の生に悉地を求む」とは、慧力勇猛にして、佛果を期尅するなり。「但だ心を作す」とは運心なり。「爲す所既に終竟る」とは、至顯の相なり。「外の儀軌」とは事相の供養なり。「阿梨沙アリシヤ」とは、佛の功德を歎ずるなり。「無等にして動さることなし」より、「三界に所依なし」に至るまでは、嘆佛功德門なり。初の二句は苦を抜くなり、二の二句は樂を與ふるなり、三の二句は苦を抜き樂を與ふること限際なり、四の二句は限時あることなし、五の二句は能く蔽ふことなし、六の二句は濟ふに及ばざることなし、七の二句は與へざる者なし、八の二句は能く果を生せしむるなり、九の二句は願休まず、十の二句は畢定して與ふるなり。「當に梵本を誦すべし」とは、梵文なり、梵文を得ずば、唐文に依りて意を得ること亦同じ。「是の如くの偈讚を誦持し已りて」より、以下の六頌半は、結前願嘆乞重制禁門なり。初の二句は前を結びて後を起す、次の二句は乞願、次の四句は歎德、次の六句は重乞、次の八句は重歎、最後の四句は勸制なり。問ふ、第一第二の請と、第一第二の歎と何の義かある。答ふ、前の願は果を請ひ、後の願は果の用を請ふ、前は佛の我の德を歎じ、後は虚空藏の明に、衆德を具することを歎す。

持誦法則品第四

四門前に同じ。初に釋名とは、能修の心中に、所修の法則を了了に記持す、故に持と言ふ。所修の法則を、口中に能く誦す、故に誦と言ふ。法則とは能持の因心、所得の果報、畢竟じて差はざるが故に、法則と言ふ。言はく、所持誦の法即ち是れ則の故に、持業釋なり。二に來意とは、前の品の中の供養の人、持誦するが故に、此の品來るなり。三に宗趣とは、説く所差はざる、是れを宗とす、利を得て他に與ふる、是れを趣とす。

四に文を釋せば、二あり、先づ標、後に釋なり。(一)標の中に、初の二句は前を結びて後を起す。「聖天」等とは、聖者菩薩なり。天とは淨なり、大日の化したまふ所、應機の天なるが故に。「相應の座に住す」とは、道場に入り、本尊に對して坐する即時なり。「三昧に入る」とは、一境に專注するなり、心を本尊に住めて、心に暫くも捨てざるが故に。「四種」とは、左の文に本尊を觀じ、本尊の心中の圓明に眞言の字を照見して、次第に受持するなり。「靜慮」とは、反つて定を謂ふ、心を四處に住めて、外に散なさが故に。「軌儀」とは、彼の四を觀ずる即ち軌儀なり、能所合するが故に。「能く内

(一)標等 八句あり。



心をして」とは、即ち自心なり。理に合はんことを望むに、いま本心に稱かなひて喜樂を生ずるが故に、故に「喜樂を生せしむ」と言ふ。「眞實義を以て」とは、深く眞言を觀じて、不生を悟るが故に。「加持」とは、眞言の上の中に觀心を安するが故に。「當得」とは、初め觀心の時なり。「成等引」とは、本不生に合ふが故に。

- (二) 十三句あり。
- (三) 十句あり。
- (四) 九句及び長行三句あり。
- (五) 七十句及び三眞言あり。
- (六) 十二句あり。

(六) 八句及び長行一段あり。

(七) 六十八句及び二眞言等あり。

後の釋に約するに十門あり。一に「若し眞言念誦を作さん時」より、「是れを世間の具相の行と名く」に(二)至るまでは、有相念誦門、二に「四支の禪門は復殊異なり」より、「瑜伽の勝義品の中に説けり」に(三)至るまでは、無相念誦門、三に「次に明の字門を轉變すべし」より、「前の品の中に説く」に(四)至るまでは、是れ變字成身門、四に「本尊の三昧と相應す」より、「息に隨ひて出入す」に(五)至るまでは、是れ本尊三昧隨息門、五に「或は意支の法を修す」より、「また一の方便と爲す」に(六)至るまでは、是れ意支念聲眞言門、六に「諸の福慧を修すること有らん」等の一偈は、是れ修無定門、七に「若し現法を樂求す」より、「具支の供養應に是の如く知るべし」に(七)至るまでは、是れ樂求現法成就門、八に「復爲に樂ひ修習する」より、「速かに悉地を成就することを得ん」に(八)至るまでは、是れ大日三密速得門、九に「復次に若し觀念せば」より、「速かに成就

- (二) 十二句及び一眞言長行等あり。
- (三) 三十四句あり。
- (四) 有相念誦門。

(四) 無相念誦門

(五) 變字成身門

ずることを得ん」に(九)至るまでは、是れ釋迦眞言成就門、十に「復次に本尊の所住」より、「智者應當に悉く知解すべし」に(十)至るまでは、是れ秘密事業可解門なり。

(三) 初の中に「念誦時」とは、珠を捻りて初めて念誦を起す即時なり。「今」とは上の時を今と言ふ。「彼方便」とは、初念誦の時を即ち彼と言ふ。「所開示」とは、供養儀式品の中に於て本尊を開示するなり。「心をして淨く垢なからしむ」とは、貪瞋癡等の念を起さざるなり。「數」とは、所説の數滿つるなり。「時分」とは剋限の日月なり。「相現等」とは、圖像と塔との中より、誦する聲と光明とを出すなり。「有相」とは、自身の以外に相を帯びて觀するが故に。

(四) 二に「四支」とは、右の四種なり。「復殊異」とは、自身の已外には本尊を觀せず、凡そ正しく觀する時は、即ち自ら大日と作る。「少」とは修する時多からざるなり。「福」とは、外の香華は力なくば辨じ難し。「成就」とは、悟妙に大日本地の智に契ふが故に、下の一句は證說を引く。

(五) 三に「身秘の懷幟」とは、本より自身本尊の形と見るなり。「彼乘位」とは、自の本尊の位なり。



(三) 次等 以下は疏の第十卷眞言藏品の文殊の眞言を釋せる文なり。

(一) 四に「心を以て」とは種子の字なり。「心に置く」とは空心なり。「種子とす」とは、行者心に眞言を念誦するに因りて、因に従りて果を得、故に種子と言ふ。「菩提心」とは眞言なり。「鬘金色」とは眞金色なり。「童眞」とは童子の異名なり。文殊師利菩薩眞言門をいばば、(二)次に文殊、佛の加持神力三昧に入りたまふ、此の加持三昧は、上に毘盧遮那經の初に説けるが如し。醯醯クイイの義なり俱摩羅迦クモラカ、是れ童子の義なり、即ち是れ呼召して一義、摩羅は是れ魔の眷屬謂はゆる四魔なり、此の眞言は摩字を以て體とす、又俱は是れ摧破の即ち是れ大空の義なり、此の大空を證するを以て一切の魔を摧壞するなり。毘目底鉢他悉體多ビモクシテタ、解脫道に住すはく此の童子の解脫道に住する者を呼ぶ、即ち娑摩羅娑摩羅サマラサマラ、憶念憶オクニエン、先立つる者なり、是れ諸佛の解脫なり、謂はゆる大涅槃なり。或は普現如來と云ふ、大悲の加持力を以て、童子の身意は云はく、童子の解脫道に住する者を醯醯して、本立てし所の願を憶念せしむるなり。一切諸佛の法身成佛して、身口意秘密の體に入りたまふ、一切の有心、能く及ぶ者なし、故に自在加持の力を以て、還つて生死に於て衆生を救度したまふ。此の眞言の意も亦爾り、此の童子は久しく已に法身成佛するが故に、其の本願を憶ふを以て、衆生を度したまへと請ふなり。若し我れを見聞し、觸知し、憶念する者あらば、みな三乘に於て畢定することを得、乃至一切の願を滿す。此の菩薩は久しく已に成佛したまふ、謂はゆる普見如來なり、或は普現如來と云ふ、大悲の加持力を以て、童子の身

(一) 以上疏の文。

(二) 迦等 以下は疏第七卷の迦字門を釋せる文なり。  
(三) 迦哩耶 Kariya

を示す。(一)

普通種子心眞言門をいばば、(二)迦字は一切諸法離作業の故にとは、梵音の(三)迦哩耶は是れ作業の義なり。諸の外道の如きは、作者使作者等ありと計す、諸部の論師も、亦作あり作者あり、所用作法あり、三事合するが故に、果報ありと説く。若し般若の方便に因りていばば、決定ありと謂はば即ち無因に墮つ、若し無因に墮つれば、一切の法則は因果なし、能生の法を因と名け、所生の法を果と名く、是の二法は無なるが故に、作と及び作者と、所有の作法と、罪福の因果報と、及び涅槃の道と、一切皆無し。復次に作と作者と、相因待して生ず、若し定めて作法あらば、則ち當に定めて作者あるべし、是れみな外道の論議に異ならず。中論の觀作作者品の中に廣く説けるが如し。今正しく作と作者等とを觀察するに、皆悉く衆縁より生じて、即ち本不生際に入る。本不生際とは、佛ありとも佛なくとも、法爾として是の如し、誰れか之を造作せんや。是の故に若し迦字を見れば、則ち一切諸法は皆是れ造作の成す所なりと知るを、名けて字相とす。若し是れ作法あらば、當に畢竟して無作なりと知るべきを、名けて眞實の義とす。(四)

(四) 以上疏の文。



(二) 薩等 以下は  
疏第十卷眞言藏品の  
一切諸佛の眞言  
を釋せる文なり。

(三) 以上疏の文。

六四八  
一切諸菩薩眞言門をいはば、南廔三曼多勃駄喃命前の如し。薩婆他一切微沫底慧なるを以ての故に之を名けて疑とす。此の字微積羅停除なり。此れは是れ除棄の義なり、人の養ダム達摩ダト法界なり、無の無慧を除きてみな法ニリヤ涅闍多此れより生ずるは即ち是れ法界生なり參多此の三字は皆薩サは是れ堅の義なり、此の堅固を除くに猶るが故に、最勝とす。點は是れ三昧なり、二乗の涅槃に入るが如く、此れは即ち是れ堅固の義なり。乃至若し堅あるは即ち是れ生住の相なり、一切の動不動の法は、皆是れ不安なり、此れを除くに猶るが故に、重空三昧の義あり。訶は即ち是れ行なり、謂はゆる如來の行なり。三三。當に虚空に等しきことを得べし」とは、理の虚空なり。「諸法を説くこと亦然り」とは、ただ伽字のみに非ず、一切の字も亦然り。「其の首の内」とは、首の骨の内腦の上なり。「初字」とは、金色の阿字なり。「純白」とは、點を着くる阿字なり、百明の中に於て最勝王なり。「心」とは勝の中の王なり。「眼界」とは眼處なり。「無垢の字」とは攪ラ字なり、謂はゆる眼處に安くが故に。「現前」とは、眼心と共んじて見ることを得るなり。「彼心處」とは、行者の空心なり。「此の心より起る」とは、初阿字心より聲字を起す。「迦字を以て首と爲す」とは、初なり、初とは因なり、因は種子なり。「餘字門」とは、字門別なるが故に、本尊

別なるが故に、「或復」と言ふなり。「皆當に是の法を修すべし」とは、迦字を以て種子とするなり。「念ずるに聲の眞實を以てす」とは、理は造作無きなり。「或は持つ所の眞言」とは、目の本尊の眞言なり。「環列」とは廣眞言なり。「圓明」とは心の圓明なり。「單字」とは種子なり。「句因」とは、三字以上は即ち是れ句なり、能く法を詮すが故に、物を解せしむるが故に。因とは字相依るが故に、相由るが故に、然も眞言法の中には、一一の字に能詮の法を具足するが故に、物を解せしむるが故に。「息に隨ひて出入す」とは、自の息なり。

(二) 意支念聲眞言  
門  
意支念聲眞言  
修無定門  
樂求現法成就

(一) 或は意支法を修す」とは、意支とは心外の事に簡ぶなり。「應理」とは、心に至るなり。「方適」とは持誦の處時なり。「懈」とは疲なり。「また一の方便と爲す」とは、因より佛に至るまで、一に此の法に依るが故に。

(二) 六に「諸の福慧を修することある」とは、劣慧少福の初念誦の人なり。

(三) 七に「若樂求現法」とは、深慧勇猛の人なり。「上」とは佛なり、「中」とは菩薩なり、「下」とは煩惱を斷ずる聲聞なり。「心受持」とは辦事に簡ぶなり。「隨力」とは亦得るなり。「一落又」とは、十萬なり、亦は見と言ふ。若しは一一の數の中に本尊を離れず、



門(二) 大日三密速得

(三)阿等 以下は疏第七卷の阿字門を釋せる文なり

心散亂せざるを、一落叉に満つと言ふなり、若し散亂の人は萬萬落叉すれども亦成就せず、要す定心を得れば本尊を見ることを得、故に見と言ふ。「第二月を経て具支の方便を邁ち修す」とは、第三月の一日を初として、成就の法を作せ、謂はく、佛の指麾を蒙るを待ちて方に作すなり。「心意を以て持誦す」とは、光等を見ることを待つなり。

(二)八段の中に、「一月を経る」とは、一落叉を満つるなり、亦は一見と言ふ。「次に彼の方便を説く」とは、満てんと欲し見んと欲して念誦する時なり。「當依」とは左の法なり。大日如來の種子心眞言門をいはば、(三)阿字は一切諸法本不生の故にとは、阿字は是れ一切法教の本なり。凡そ最初に口を開くの音に、皆阿の聲あり、若し阿の聲を離るれば、則ち一切の言説なし、故に一切衆聲之母とす。凡そ三界の語言はみな名に依る、名は字に依る、故に悉曇の阿字を亦衆字之母とす。當に知るべし、阿字門眞實の義も亦また是の如し、一切法義の中に遍す、所以は何にとなれば、一切の法は縁に従らずして生ずることなきを以て、縁に従りて生ずる者は、悉く皆始あり本あり。今此の能生の縁を觀するに、亦また衆の因縁より生ず、展轉して縁に従ふ、誰れをか其の本とせん。是の如く觀察する時は、則ち本不生際を知る、是れ萬法の本なり。猶ほ

(二) 以上疏の文。

一切の語言を聞く時、即ち是れ阿の聲を聞くが如く、是の如く一切の法の生を見ば、即ち是れ本不生際を見るなり。若し本不生際を見るは即ち是れ實の如く自心を知るなり、實の如く自心を知るは即ち是れ一切智智なり、故に毗盧遮那唯だ此の一字を以て眞言としたまふ。而も世間の凡夫は諸法の本源を觀せず、故に妄りに生ありと謂へり、所以に生死の流に隨ひて、自ら出づること能はず。彼の無智の畫師の、自ら衆彩を運びて、畏る可き夜叉の形を作し、成し已りて還つて自ら心に怖畏を生じて、頓に地に躡るるが如く、衆生も亦また是の如し、自ら諸法の本源を運びて、三界を畫作して、還つて自ら其の中に没し、身心熾然として備さに諸苦を受く。如來有智の畫師は、既に了知し已りて、即ち能く自在に大悲漫荼羅を成立す。是れに由りて言はば、謂はゆる甚深秘藏とは、衆生自ら之を秘するのみ、佛の隱したまふことあるには非ず(二)。問ふ、此の阿字は是れ種子なり、前の第三品の中には、是れ大勤勇の種子なり、即ち疏には是れ大日の種子なりと云ふ、其の義云何。答ふ、阿字は是れ菩提の果を生ず、欠字は是れ果涅槃を現す、是の故に二俱に種子なること、亦是れ妨なし。

如來豪相眞言門をいはば、歸命は前の如し。阿は行なり、痕は因なり、若は生なり。



此の不生の行を以て、一切の因を淨む。闇を生不可得とす。「前の如く阿字を轉じて」等の一頌は、惣じて能成の字を歎ず。「本尊の瑜伽に住す」より以下は、能成の字に依りて、行者の身を莊嚴することを廣く釋す。前の中に「前の如く阿字を轉じて」とは、阿等の五字を以て、行者の身上を加持するに、加持する所の五字能く轉ずるが故に、「大日尊と成す」と言ふ。廣釋の中に、「本尊の瑜伽に住す」等の一頌は、字を安置する所の處を明す。「於三摩」等の一頌は、能觀の心所作を明す。五種の眞言心門を用て、五字を身と爲し、豪相の印を眉間に置き、阿字を百光と爲す、果を成し、無垢眼を開きて、性淨の理を見て、無生の宮に坐す。「阿字は遍く金色なり」等の一頌は、字の色並に安く所の處を明す。此の中に「用て金剛輪を作す」とは、字の安かるる四角の金剛輪なり、字の色よりは少しく淺し。「下體を加持す」とは、眞言者の腰の中なり。「瑜伽」とは、佛身と我が身と異なることなきが故に、瑜伽と言ふ。「座」とは佛の坐の法に依るが故に。水等の瑜伽は知る可し。「鏡字」等の一頌は、悲水の瑜伽を明す。「霧聚」とは、行者の自の壽なり、亦霧聚とは、字の安かるる滿月輪なり。「覽字」等の一頌は、智火の瑜伽を明す。中に「三角」とは、字の安かるる處を明す、字の色よりは少

(二) 釋迦眞言成就  
(三) 次等 以下は  
疏第十卷眞言藏品の  
釋迦實證三昧の  
眞言を釋せる文なり

しく淺し。「哈字」等の一頌は、自在の瑜伽を明す。風輪とは字の安かるる半月輪なり。「住字」等の一頌は、大空の瑜伽を明す。「一切の色を成すと想ふ」とは、但だ字のみ一切の色を成すに非ず、字の安かるる四角の處も、亦一切の色を成す、字と處とは、處は少しく淺し。「百光遍照王」とは、有點の阿字なり。「無垢」とは覽字なり。「心月の圓明の處」とは、有相念誦者の見る所の本尊の心處なり、若し無相念誦の人の觀する所は、即ち是れ自の空心の處なり。「聲盤」とは、種子の字をば中間に置き、餘の字は周匝し圍遶せしめよ。「處に隨ひて受持す」とは、自の本尊の眞言なり。  
(二) 第九段の中に、釋迦如來眞言門をいはば、(三) 次に釋迦如來、寶處の三昧に入りたまふ。寶處こより出づるを、名けて寶處とす、猶ほ大海より種種の寶を出すが如し。若し彼の洲に至るときは、則ち意の所須に隨ひて、足らざる所なし。佛此の三昧に入り已りて、其の面門より種種の光を出したまふ、光の中に此の眞言を現し、乃至普く一切の佛刹に遍す。餘の眞言も當に知るべし、此の如くして説くと。薩嚩訶囉者一切惱な泥蘇駄那一切の煩惱を摧伏すと云ふ薩嚩達麼一切法、嚩勢多補羅鉢多自在を得るなり、上の句に通り得と云ふなり、諸障伽伽那なり娑摩娑摩しくして無邊清淨なり、一切に於て自在無礙なるを虚空に同ずるを除くを以ての故に



(一) 私疏の文なるが故に私とは一行阿闍梨なり、不可思議和尙には非ず。  
(二) Icthanika は一闍提と書けり、斷善根、信心不具足の衆生を云ふ。  
(三) 以上疏の文。

なり、下の句は阿と相連して是れ無等なり、不等とは即ち是れ二乗なり、開ぐる所あるを以ての故に無等と名く、即ち是れ施權の意なり。然るに此の眞言は、初の薩字を以て體とす。娑は是れ漏の義、亦是れ堅の義なり、阿字門に入れば即ち無漏無堅なり。若し堅牢なることあれば、即ち是れ生滅壞破の法なり、若し阿字に同せしむるは、此の堅本來不生なり、即ち是れ諸法の中に自在を得て、虚空に等しくして、能く一切の寶洲となる。(一) 私に謂はく、釋迦は大悲力の周體に於て密緻なること、猶ほ金剛の如くなるを以て、(二) 一闍底等をも、亦此の見を破壞して、佛法に入らしむ、其の大寶を施すの願、豈に諸法の中に於て、自在を得て、能く一切の堅牢を破したまふに非ずやと(三)。「如是」とは、毗盧遮那と釋迦牟尼との法の中に於て、念誦者、莊嚴する所の身の如くするなり。本經とは別經に簡ぶなり。「亦當に前の方便の如く」とは、此の經なり。字門觀とは種子なり。「若し此の如來の行に依る」とは、菩薩金剛等に簡ぶなり。「大悲胎藏」とは、如來大悲の業なり。「王」とは毘盧遮那是れなり。「得阿闍梨灌頂」とは、傳法阿闍梨灌頂を得るなり、律の中に具足戒を受くるが如し。「持明灌頂」とは、律の中に未だ具戒を受けざる者の如し、ただ自ら本尊の眞言印を作して念誦すべし、廣く行學することを得ず。若し遍學することを得んと欲せば、佛の加被を蒙るに至る

門(一) 秘密事業可解

まで、誠を至して念誦し、加被を得已りて後、傳法阿闍梨を請ひて、遍學阿闍梨灌頂を蒙ることを得て、乃ち能く廣く行せよ。「四支禪」とは本尊等なり、ただ煩惱を滅するのみに非ず、修行者に於て法則を具足するなり。本法とは入佛三昧耶等なり。

(一) 十段の中に五種の門あり。初の二句は惣なり、「本尊の住する所」とは、三部等の中に何れの尊をも得るなり。「曼荼羅位」とは、本尊を得るに隨ふ、壇を造ることも爾り。次の二句は釋なり。「彼形色」とは、本尊の色なり。「此の瑜伽に依りて」とは、本尊金色ならば、壇も金色なり、本尊壽金ならば、壇も壽金なり。二に初の二句は惣標、次の二句は略釋なり。「三種あり」とは、因より果に至るまで、三種の義あり、其の中間に於て、寂災とは、亦心に念誦するが故に、三毒の煩惱不生なりと悟るを、寂災と言ふ。増益とは、煩惱不生の智は即ち是れ佛果なりと悟りて、佛果を得るが故に増益と言ふ。降伏心とは二義あり、一には佛を得て已後、煩惱の起らざるを降伏と言ふ、二には起らざるを以ての故に、能く萬德を攝す、亦攝召の義あり。三に純素等の二句は、彼の形色を釋す。凡て四分せば、素とは圓の場なり、黄とは方の場なり、赤とは三角の場なり、深玄とは八角の場なり、即ち是れ蓮華の場なり、純と色との二字は、







(一) 第一段 上弘  
下化修供門

(二) 第二段 如佛  
我修廻向門

(三) 第三段 獻闍  
伽後送尊門

嗽すべからず」に至るまでは、是れ自住佛身請經門、六に「次に搏食を奉る」より、「真言所説」に至るまでは、是れ搏食奉獻本尊門、七に「復誦施十力」より、「休息少時」に至るまでは、是れ誦十力明本尊瑜伽飲食門、八に「復當に禮拜すべし」より、「隨類悉地」に至るまでは、是れ修業無間得益門、九に「常に内法に依りて深浴す」より、「是れを世間の悉地と謂ふ」に至るまでは、是れ淨水深浴摧障門、十に「次に無相の最殊勝なるを説く」より、「當に出世間の成就を得べし」に至るまでは、是れ無相最勝證請門なり。

(一) 第一段の中に「前の事業の如く」とは、不動尊の真言印なり。「金剛薩埵の身と作る」とは、鍍字を以て身を成すなり。

(二) 第二段の中に「證知解了」とは、内證の境界なり。「如來大住」とは、本不生の處なり。「大悲願を興す」とは、自ら得たる所の理を、一切衆生に與へんと欲するなり。

(三) 第三段の中に「各當に所安に隨ひて」とは、本不生より來りて、今本不生に還るなり。「後に復哀を垂れて赴くべし」とは、衆生の爲に來りたまふ、後に請ぜん時にまた、我れを度して捨て去りたまはざれとなり。若し深密の釋ならば、既に自ら本尊と作れり、何れの時か佛海を離れんや。「法界の本性」とは、噴字なり。「明」とは真言なり。

(一) 入佛等 入佛  
三昧耶と法界生と  
金剛薩埵となり。

(二) 第四段 被甲  
現修如佛門。

(三) 第五段 自住  
佛身請經門。

(四) 第六段 以下は  
疏第十卷眞言藏品の  
の菩提行等の種子  
を釋せる文なり。  
(五) 以上疏の文。  
(六) 次等 以下は  
疏同品の觀自在の  
眞言を釋せる文なり。

「印」とは手印なり。「三印」とは、(一)入佛と法界と薩埵となり。「皆悉く圓滿す」とは、明相の中に於て、道場に入りて坐する時の事了るなり。日中も初夜も亦復是の如し。

(二) 第四段の中に「又應」以下は、法に依りて念誦する者の徳を歎するなり。

(三) 第五段の中に「次に復増上心を起す」より以下は、道場を出でて以後、外の請經の處の事業なり。「觀世」とは菩薩の名なり。「蓮華」とは蓮華部の主なり。「眼」とは諸佛の眼門なり。「本性加持」とは、本尊の種子印等なり。觀自在の種子心眞言門をいはば、(四)娑は是れ諸漏なり。傍に二點あり、即ち是れ阿なり、諸漏を除遣する無漏の觀なるが故に、自在なり(五)。觀音菩薩眞言門をいはば、(六)次に觀音菩薩、普觀三昧に入りたまふ、是の平等に住して遍せざる所なきを、名けて普入とす、此の普眼を以て衆生を觀す、故に觀自在者と名く。此の三昧に入り已りて、其の心より種種の光を出したまふ、光の中には是の諸の法門眞言を現すなり。薩嚩但他竭多サハバタヘケダは即ち是れ一切如來なり、嚩路吉多ワロキダと名く即ち是れ平等觀なり、即ち是れ普觀なり。羯囉拏ケラナは即ち是れ一切如來の體なり、謂はゆる大悲を體とす、此の菩薩も亦爾り、純ら大悲を以て體とす。囉囉囉ラララ、囉は是れ塵の義なり、阿字門に入れば即ち是れ無塵なり、三重なる所以は、謂はく、凡夫と二乗との塵障を除くなり。呼は



是れ恐怖の義なり、大威猛自在の力を以て、彼の三重の塵障を恐怖して、除き淨むることを得て、佛眼に同せしむるなり。開、此の最後の字は是れ種子なり、諸字は皆此の字義を釋せんが爲なり。生に即して不生なる、是れ開字の義なり。或は初の薩字を以て體となすことも、亦同じく之を用ふることを得、是れ警覺の義なり。叫字の中に訶字あり、是れ歡喜の義なり、上に大空點あり、是れ三昧なり、下に字あり、亦三昧なり。上は三世の諸佛、皆同じく此の觀の三昧の中に行ず、故に等觀と名く。

(二) 以上疏の文。  
(三) 第六段。搏食  
奉獻本尊門。

第六段の中に、「搏食」とは、搏は是れ節量食なり。「隨意食法」とは、凡そ飯あれば四分して、一は本尊に供養し、二をば行者自分、三をば同學の者來らば食はしむ可し、四をば飢貧を濟はんが爲にせよ。若し同學を待ちて來らずば、行者自ら食ふことも亦得。「増減」とは動なり。「悅澤」とは、妙なる面の実色なり。

(三) 第七段。師十  
力明本尊瑜伽飲食  
門。

第七段の中に、「如是」とは、十方の明なり。「眞言心」とは不動の種子なり。「休息」とは眠なり。

(四) 第八段。修業  
無間得益門。  
一、二、三、私謂亂脫  
時亂脫

第八段の中に、「懺」とは此には請受と云ふ、「悔」とは解なり。「復當に禮拜すべし」とは、日中に道場に入る時なり。「乃至」とは、日中に念誦して以後道場

を出る時なり。「恒に是れに依りて住す」とは、一日三時に念誦して開がざるなり。「後日分」とは、初夜に道場に入る時なり。「事業金剛」とは、鑿字を以て身を嚴るなり。「次常運心」とは、初夜に道場に入り、中夜に至りて念誦したる時なり。「意を係けて

明に在く」とは、睡眠せんと欲する時、出入の息の中に、種子の字を以て其の中に在くなり、何を以ての故に、睡眠自ら本尊の三昧の睡と作るが故に、本尊の息即ち是れ眞言なるが故に、若し是の如くして睡れば、塵沙の三昧も睡より得るが故に、恒沙の功德も睡より悟るが故に、睡も覺も佛海を離れざるが故に、此の人は即ち是れ金剛法界宮の中の人なり。「床上」とは、好水土にて行せば、地中にて臥すことも亦得、若し惡水土ならば、其の行者を損せん、床の上も亦得、然らば太だ高きことを得ざれ、何を以ての故に、本尊は道場にて地に着けり、人をして坐すること太だ高からしめざるが故に。若し下き床は腰を損することを得、損を離るるが故に、若し自ら本尊の三昧とならば、高下を論せざるが故に、聖と凡と別ならざるが故に、高下を論ずるは着相の凡なり。「得名號」とは、人間には非ず、十方の佛國の佛邊なり。展とは策なり。

(二) 第九段。淨水  
洗浴推障門。

第九段の中に、「常に内法に依る」とは、相に着する凡夫は、外法の空を知らず、







我れに勝れんと、乃至法を以て之を降伏す。次第に下りて能く三世界の主を降伏するを以ての故に、降三世魔王と名くるなり。詞訶訶カカカは是れ行の義是れ喜の義なり、是の三行とはれば即ち此の三行本來不生なり、本不生に由る毘薩摩曳ビサマエの如きは慈を以て瞋を對治し、無貪を以て貪を治し、故に即ち此の三行を越ゆ、是れを佛行とす。毘薩摩曳ビサマエの如きは慈を以て瞋を對治し、無貪を以て貪を治し、正見を以て邪見を除く、今は乃ち大慈願を以て慈願を除き、大貪を以て一切の諸ビサマエ毘舍也ビサマエの貪を除く、此れ則ち最も信難く解し難し、故に惟しき哉と言ふなり。但他揭多タテガタカ一切の諸ビサマエ三婆嚩生サンパハシ生なり、謂はく諸佛の境界より生ずるなり、佛の境界とは謂はく帝捺路迦也テイナロカ即ち是れ微闍也ビバヤ此れ降勝のウツ義上の言ゴヤ呼召覺の義なり、若し此れを誦すれば能く一切衆生の心に進入然るに此の眞言は、此の帝唵テイオンの字を以て體とす、上に多タの聲あり、即ち是れ如如の體、即ち是れ本來不生なり、不生なるを以ての故に、即ち是れ諸の垢障も亦自ら本來不生なり、此の理に稱ひて修すれば、定慧具足するが故に、能く三世を降伏するなりウツ。「灑淨」とは、水中を掬して三遍を誦じて頭上に灑ぐなり。「具」とは三昧耶等なり。「聖天」とは本尊等なり。「身心を淨めて他を利せんが爲の故に」より以下は、念誦の道場に入りて、本尊に對する時なり。「三等」とは三密なり。「限量」とは本尊に同ずるなり。「句」とは法なり。

(二) 多如々の文

(三) 以上疏の文。

(三) 第十段 無相最勝證請門。

(三) 第十段の中に、「眞實緣生」とは、眞實とは是れ本不生の法は、妄言の相寂にして、

凡として度す可き無し、法慧常に照して無邊無斷なるが故に、世間の日の淨明中に在れば、夜相なしと知る。緣生とは、眞智其の體なり、強て言はば大悲なり。衆生は本より自ら覺體なるを知らざるを、覺體なりと悟らしむるが故に、然も緣生と言ふ。「離攀緣」とは既に覺體を知る、然るに外に佛を緣するなり。

末後の一偈は流通の中に、甚深の流通なり。此の中に初の一句は無相の法體を表し、次の一句は深法の中は劣慧の堪へざる所なり、次の一句は劣慧の人の爲の故に相法を現す、次の一句はただ有相のみに非ず、亦前後の差別あるのみ。「右阿闍梨」已下は翻譯家の語なり。此の中に阿闍梨とは聖者文殊師利なり。

又説かく、「彼れ眞實の緣生の句に於て」とは、彼とは阿字なり、眞實とは本來不生の理なり、緣生とは衆生を緣するなり、句とは法なり。又云ふ可し、「眞實緣生の句に依る」とは、眞實に依るとは本不生の理に依るなり、緣生とは阿字なり、機に臨みて聲字を示現するが故に。「内心の支分に攀緣を離る」とは、内心の支分とは、能證の智なり、攀緣を離るとは、心を本不生の理に沈むるなり。「甚深無相法」とは、本不生の理なり、相に着する劣慧は、この理に悟入することを得ざるが故に。問ふ、唯だ心



(一) 毘等三密業用の位なり。  
 (二) 阿等法曼荼羅の說法なるが故に四曼相大の位なり。  
 (三) 本等有常恒の説なるが故に六大體大の位なり。

を沈むる者あらば、更に妙用ありや。答ふ、若し能く理に沈まば、即ち是れ具するなり、何を以ての故に、能く融を行するが故に。問ふ、理は身心を用ふるや不や。答ふ、若し能く其の印を用ひば、是れを其の身心とす。問ふ、阿誰れか本法に向ひて、本不生を呼び造すや。答ふ、三種あり、一には秘密の釋、二には秘密の中の秘釋、三には秘密の中の秘釋なり。一には秘密の釋とは、(一) 毘盧遮那佛、本不生を説きたまふが故に。二に秘密の中の秘釋とは、(二) 阿字自ら本不生を説くが故に。三に秘密の中の秘釋とは、(三) 本不生の理に自ら理智ありて、自ら本不生を覺るが故に。此の供養法一卷、始より末に至るまで、唯だ一大事とすることあり、謂はゆる彼れ眞實の縁生の句に於て、内心の支分に攀縁を離るるなり。又云ふ可し、甚深無相の法は、劣慧の堪へざる所なり、彼れ等に應せんが爲の故に、兼ねて有相の説を存すと。

此の文の造人は、新羅國零妙の寺釋の僧不可思議、分に隨ひて穿鑿す、願はくは此の文を見んもの、獨り本不生の理の中に於て證することを知れ。

國譯大毘盧遮那經供養次第法義疏卷下終

大正十一年五月拾日印刷  
 大正十一年五月拾參日發行

國譯密教論釋第四奧付

【非賣品】



禁轉載

編纂者

東京市小石川區關口駒井町四番地  
 塚本賢曉

發行者

東京市牛込區若宮町三十五番地  
 伊豆宥法

印刷者

東京市芝區愛宕下町三丁目一番地  
 渡邊常三郎

印刷所

東京市芝區愛宕下町三丁目一番地  
 國譯密教刊行會印刷部  
 電話芝四九一五番

發行所

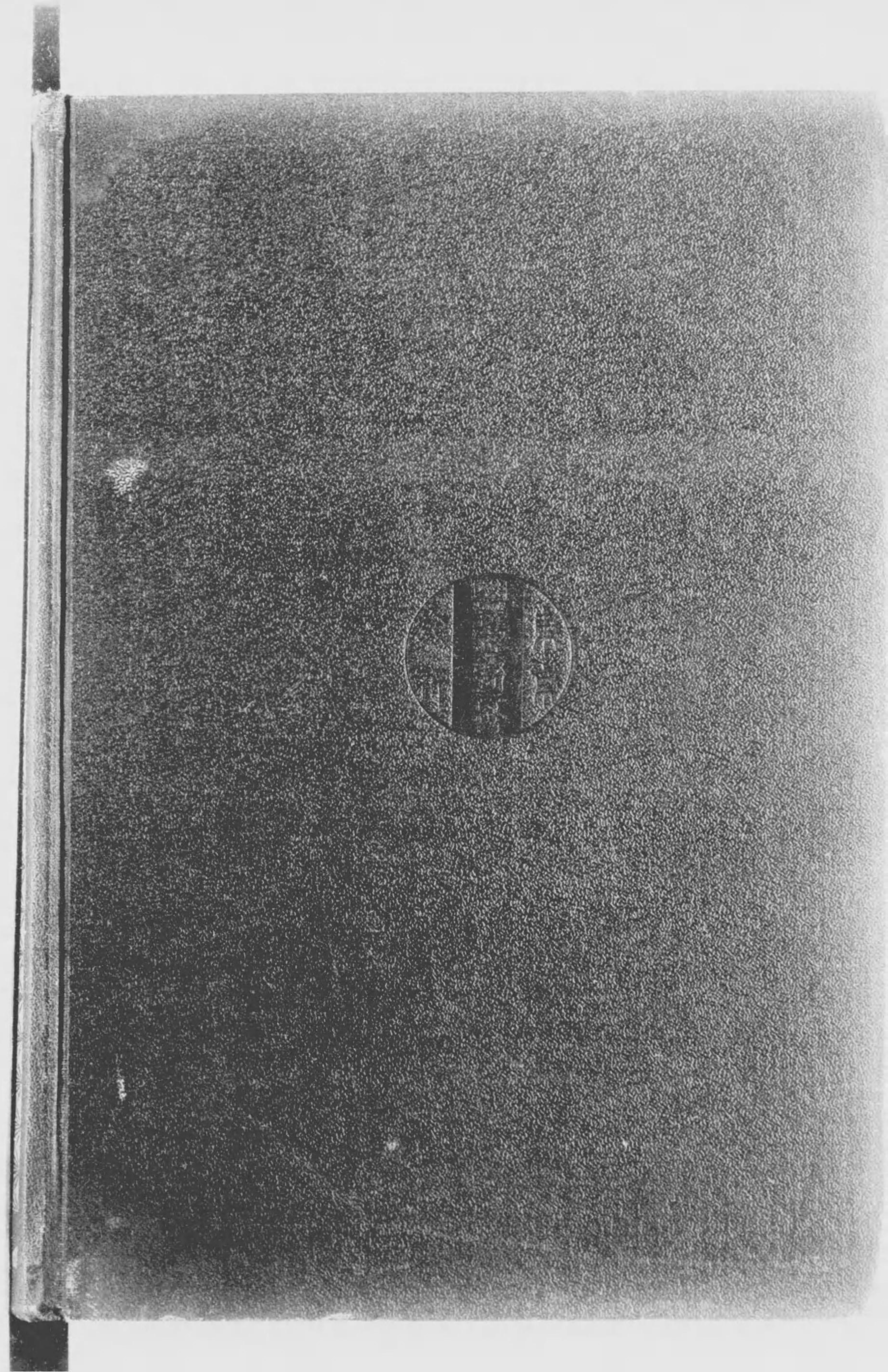
東京市牛込區若宮町三五番  
 振替東京五〇一八七番  
 電話番町二五二三番

國譯密教刊行會



353  
283







終